

---

# グリーンピース

真琴

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

グリーンピース

### 【Zコード】

Z7398D

### 【作者名】

真琴

### 【あらすじ】

友達がいざ、学校でいじめられている香織。そんなある日、麻里という子が「友達になろう」と話しかけてくる。それがきっかけとなり香織は徐々にいじめられなくなり、麻里との仲も深まっていくが・・・・。最初はダークな部分もちょっとだけありますが、後々感動っぽい話になっていきます。

## プロローグ

暖かい陽気が心を和ませる春。

そんな季節の、ある太陽が照る朝。

施設の門のところで、一人の男の子が眠っていた。その子はまだ言葉も満足にしゃべれない文字をまともに書くこともできない、お父さんとお母さんに、まだほとんど何も教えられない。なのに、門のところで白い毛布にくるまれて男の子は眠っていた。

朝施設の人にはその存在を気づかれたとき、男の子は全く悲しそうな表情すら見せず、平然と笑っていた。でも、その笑顔にはぎこちなさがある。今自分がどんな現状に置かれているか分からぬいう男の子にも隠そうとする感情が、気のせいかちらちらうがえた。

「お名前は？」

施設の人が聞く。

「ゆう」「ゆう」

3才くらいのその男の子はそう言った。

「ゆう、ちゃん？」

「ゆう、ゆういち」

かわいらしげに声でやう自分の名前を言つ男の子。親指を口で加えながら光つた小さな手で話すその子は、あまりにも親と離れるには幼すぎた。

名前しか言葉を知らずにここまで育つたこの子に『えられた最後の愛情。それは白い毛布。男の子の体を包んでいた毛布。そして、その毛布に赤い糸で縫われた「友永祐一」という名前。

「友永、祐一くん・・・・・・」

施設の人は言葉も喉が詰まって出ず、ただ男の子をぎゅっと抱きしめていることしかできなかつた

施設に男の子が入つてからも太陽と月は入れ替わりを続け、そして10年の時が経つた。

彼はもう男の子とは呼べないほど成長し、現在14才。

心が育ち複雑に絡み合う年代。

そんな時期彼はずつと前から疑っていた一つのことに対する確信を持つようになり、やがてあることを実行しようと決意した。それはとても恐ろしく、なのに100%全て悪いと言い切れないほどの纖細さと愛しさがある。間違った行為といつてしまふだけでは済まない、戸惑いの決意だった。

## プロローグ（後書き）

連載が遅くなることもあるかも知れませんが、もし気に入っただけたら幸いです。

6月5日、天気曇り時々雨。

入学してまだ2ヶ月しか経過していない、しかし学校での人間関係はもうすっかり構築されている。なのにその日になつてもわたしはいまだ学校になじめず、思えばこんな目に遭つたのも当然といえば当然だつたのかもしれなかつた。

上靴に履き替えようと革靴を脱ぎ、脱いだそれを片手で持つてもう一方の手で靴箱をキーンと「う金属音で开けると中に、紙が入つていた。

こんな経験初めてだつたからわたしは変な期待をしながら、二つ折りのその紙を開き見た。

死ね

いきなり日に飛びこんできた2文字の刃。

冗談が飛び交う教室では定番となりつつある言葉が人付き合いほぼゼロのわたしに向けられたことはほとんど無かつたけど、そのぶん人より刃の先の锐さに対する免疫は乏しかつたらしく、重い音をたてて心臓を貫いた。

同時にグサツとした痛みが中心に襲いかかり、すぐにそれはテンポの速い鼓動となつて表れた。

何分間か『死ね』の字の意味を分かつていても受け入れられないでいるうちに、動搖は鈍い違和感を残したまま、粉薬が水といつしょに喉を通るようにして赤い血の巡る全身にサツと溶けた。

・・・・・あ、いじめだ。

そのとき、難なく理解できる自分が、そこにいた。

前々から孤独な自分が標的にされる率の高いことを心得ていたのに、今日明日そくなつてもいいように構えていたのに、それでも悲しく

なつて息苦しく、肺が痛んだ。

ここまで理解していくもわたしは紙を素早く最初の形に戻して、さらに四つ折りに、続いて八つ折りにしていた。何かの間違いだと思ったかつた。それでなんとか息を整えてもう一度半開きの口で開くと、やつぱりそこには『死ね』と書かれてある。ボールペンで、強く書かれてある。

紙を持つ手が震えた。

唾が喉を通らなかつた。

頭は混乱している。かと思えば、意外にも冷静に、自分が見てきた過去を思い返していた。

わたしがいるクラスには、入学して1週間で不登校になつた生徒がいて、その子はいじめられていた。カバンをゴミ箱に捨てられ靴を花壇に埋めこまれ上靴に画びょうを入れられトイレで水を頭にかぶせられ、徹底的に潰されてある日学校に来なくなつたその子の名前をわたしははつきりと覚えていない。たぶん山か川かどちらかの字が名字にあつたと思う。そんな平凡な名前のその子でも、友達がいなければいじめられてしまう。きっとその子はこれからわたしを映す鏡なのだろう。学校にいる間は常に恐怖、それと戦う余地もない人だから友達ができるわけであつて、学校で誰とも話さず家に帰るわたしはその条件にピッタリ合づ。良かつた。あの子が先で良かつた。

そう思えば、まだ気分は落ち着いた。

一番目なのだ。わたくしより卑下される人が、上にいるのだ。

山か川かどちらかの名前の子より、わたしは少し周りから見た価値が高いのだ。

でもそれでも震えは止まらない。

手の指先から始まつたそれは恐怖と結合し、いつのまにか腕を通り肩に行き着き、そして胴体を過ぎて足全体にたどりついていた。震動は懸命に立とうとする筋肉の力を消していく。

足を地面に押さえつけてなんとか体勢を保つていたら、突然チャイ

ムの音が響いて、瞬間、全身の力が吸いとられたように抜けた。

「見てよ、あの市村香織つて子。惨めだよねえ相変わらず」「ほんと、ありえない。なんであんなに惨めな子が、こんな学校に

来ちゃつてんだろう。迷惑だよ、ねえ」

「死んじゃえばいいのに、あいつ」

その日一日で、学校は地獄に一変した。

朝登校したとたん浴びせられる一言一言は、わたしを痛めつける道具以外の何者でもなかつた。最初は耳に入らなかつた言葉もいつしか、耳をふさげばふさぐほど敏感に聞こえやすくなつてきて、誰かが近くで耳打ちしてゐるだけでも不安になつてきた。

暴力はなかつた。

殴る、蹴る。体の傷となつて後々現れるその行為を証拠として、先生にわたしがいじめられることを告白する事を怖がつているのか。それとも、この人たちはそういう見た目でわかる傷の付け方よりも言葉で心をボロボロにすることこそが、最も相手にとつて苦痛なものだということを心得ているのか。

どちらにしても、わたしはみんなが急に自分とは違つ世界にいるようで、常に孤立感におそわれるようになつた。移動教室も休み時間もどれもこれも独り。

陰口を言う人はだいたい決まつていていたけど、そのぶん見ているだけの人もいつも同じ顔ぶれだつた。

運命ツテ残酷ダヨネー。

お金のジャラジャラ入つた財布の中身を確認しながら何の気なしに言つ人たちが、わたしは大嫌いで大嫌いで、そして怖くてしようがなかつた。残酷つていう言葉を口癖の「ご」とく簡単に口に出せる人なんか、本当に苦しんではいない。実際はわたしみたいな人間に残酷さを与えてばかりいる、卑劣なやつだ。

将来ガフアン?

時々テレビのCMなんかで中高生がつぶやいている。  
ふざけてるのか、それを見るたびそう思つ。

わたしなんて、1分1秒が不安の連續だ。自分の隣を誰かが通るだけで鳥肌が立つ。将来大学受験があつていつかはきっと就職しないといけない、一体わたしはどうなつちやうんだらう。そんな不安とは比べ物にならないほどの深い闇こそが、わたしの中でいう不安なのだ。

学校にいる間は、時間が消滅してしまえばいいと思つていた。  
でも時間は過ぎていく。

いじめられて、1ヶ月が経つた。

このころわたしは夏休みを待ち望んでいた。40日間、ずっと誰からも存在を否定されないなんて、なんと幸せなことだらう。今では天国のような場所となつた家で好きなことをして好きな時間だけ寝ていられるなんて、天国を通り越した夢の世界だ。

そう思つた半面、でもよく考えたら、「あと一日くらい、いいか」と8月31日に甘えを見せてしまつそつ。そして名前も知らないあの子みたいに不登校になつてしまつ。降参でーす。

そう白旗を揚げたら、ざまあみろと形のない背中を蹴られる。寒気がした。プライドじゃない他の何かが、敗北を認める」ことをいやがつっていた。

そんな精神不安定なあのとき確信を持つて言えたことは、今は苦しくても必ず状態はよくなりますよ、なんていう病院の先生が言つその時だけの慰めなんかじやなくともつと厳しい現実、無視とか悪口くらいで嘆いてたら冗談抜きでわたしは完璧に壊滅してしまつ、といふことだ。

だから、わたしは、学校に行つた。

けつして負けるなんてことは、したくなかった。

教科書を開くとどのページにもある、赤や黒の乱雑な色で書かれた中傷の言葉。

一度国語の授業中、先生にページ45を読むよう指示された。あいにくページ45は、といつかほんどのページは「バカ」とか「クサイ」とかで埋めつくされていて、読もうとも途切れ途切れにしか読めない状態だった。あのときしようがなく、「すみません忘れました」と言った時の惨めさははかり知れなかつた。

頭の中で試行錯誤してゐるうちに夏休みが始まった。わたしは朝から晩までボーッとし続け、40日何も考えず過ごした。そうしているほうが、不思議と心は休まつたのだ。でも常に40日後に迫る現実に対して、不安がどこにある。だから、休もうとしても充分には休めなかつた。

こうしてあつといつ間に夏休みは終わり、そしてまた寂しさの鐘が鳴つた。2学期が始まつたのだ。

40日の空白が何かをえてくれるんじやないかと期待して、白旗を揚げることなく学校に行つてみたわたしだが、案の定前のままだつた。けど、一つだけ変わつたことがあつた。

「わたし市村さんと友達になりたいな」  
体育の授業を誰もいない教室の窓からぼんやりながめていたら、突然言われた。

彼女 渡辺麻里はいじめられていなければクラスでどこか浮いている、ただただ孤独なだけの存在。かといって無視されてるわけでもない。それに最近はあまりそんな様子はないようだけど、1学期の間は実際に上手くクラスのいろんなグループと混じって会話していたようだ。いわば、嫌いだけどチャーハンか何かに入れさえすればどうにか食べられちゃうようなグリンピース、ヒヨコくらい似た存在だったと思つ。

そんなわたしとは同じようでどこか違うような渡辺麻里に話しかけられたわたしは動搖しているかと思えば、思ったより平常心でいた。

「友達になりたいな」

黙つていたら、また言われた。

ものすごく危険な雰囲気を出している渡辺麻里の体を吟味したらさらに全身の毛が逆立つて注意信号を示し、素直すぎると変わりものに思われちゃうよ、そう忠告したくなつた。

「なんでここにこるの」

わたしは警戒の姿勢でそう聞いた。

「あ・・・・・ 実はわたしも体操服忘れちゃつて。市村さんもでしょ?だから教室にいるんだよね。見かけによらず意外におとぼけさんなんだね、市村さんつて。わたし個人としては、市村さんけつこうしつかりしたイメージがあるから」

「離れたほうがいいと思つ

「えつ?」

「わたしと一緒にいたら、渡辺さんもこうなるよ」

はさみでジョギジョギにカットされた自分の体操着をカバンから出

して、わたしは渡辺麻里に見せた。

今朝体操着がめちゃくちゃになつているのを発見したときの怒りとやるせなさ。わたしは体育が苦手だ。出来れば苦手なことはしたくないけど、それを他人から強制的に禁止させられるのは耐え難かつた。

「嫌でしょ、渡辺さんだつて、楽して生きたいでしょ」

必死に涙をこらえていたわたしをクスクス笑っていたクラスメイト。そしてそれを見ているだけの、いわゆる傍観者としてわたしをよりいつそう孤独な存在として作り上げる渡辺麻里を、呪うように見つめて言った。

「ああ・・・・・・そうだつたよね」

少し呆然の顔でつぶやいた渡辺麻里。

わたしに対しても訳なく思つていてるのだろうか。

「でも、大丈夫だよ」

彼女はこう続けた。

いじめられている人間に手を差し伸べることなんて、普通自殺行為同然だ。なのに、渡辺麻里はそれを認識していないのか全く怯える様子を見せない。

あまりにも矛盾しすぎている。

渡辺麻里と一般という言葉のために、矛盾といつものがあるような気がする。

お腹の辺りがくすぐつたい。

思わず、笑いそうになつた。

久しぶりに、心から笑えそうになつた。

わたしの返答を待つているようではポカーンとしているよりも見て取れる渡辺麻里の顔には、笑うしかなかつた。

「おかしいんだね、渡辺さんは」

結局、わたしの口はそんな言葉を言つたのだった。

この日から渡辺麻里とは、関係が深まつた。すがるもののが無かつたわたしには、そう思えた。休み時間には必ず一緒にいるし、移動教

室も一緒にする。たまたま席が近かつたから、麻里の教科書はいつしかわたしとの共用のものとなっていた。そのおかげか、今までの孤独感と絶望感で傷ついていた心の傷は少しずつだけいやされた。相変わらずその後もいじめは続いていたけれど、そのときは必ずといっていいほど麻里は止めに入ってくれたから、いつしか、靴箱もある程度おちつきを取りもどすようになった。

そして、いじめはなくなった。

皆に受けいられるようになつたのだ。

まだまだチャーハンに混ざったグリンピースにも及ばない位置だつたけど、とにかくわたしは幸福だった。そしてわたしがこんな生活をしていることを信じられずにもいた。けれども疑念なんて湧かなかつた。いつしか、あのとき覚えた恨みの感情も現実から逃げるための方を探しも、脂で汚れた皿が水とスポンジできれいになるみたいに浄化されていったはずだった。

「どうしたの、これ  
麻里を友達と思えるようになつてから数週間後。

朝わたしがかかとを踏む上靴のまま教室に入つたら、麻里は待ち望んでいたかのように近づいてきて、

「ジャッジャジャジャーシ、ジャッジャッジャッ、ジャッジャジャジャーン」

「な・・・・・に?」

「びっくりした? あのね、これ、お守りなの。持つていれば、二人は一生大丈夫。どんなことがあっても絶対に離れないんだって」  
そう言ってビー玉よりは格段にキラキラ青で光る小さな水晶にオレンジのひもがついたストラップを、わたしの手に置いた。

「まあセツトで300円だから、本当に離れないかななんて保障できないんだけどね。でも、きれいでしょ。あ、もしかして青より赤のほうがよかつた? でも残念。これ、香織が青の持つてないと意味無いんだ。渡すほうは赤を持つことって、説明書に太字で書いてたの。どっちでもいいんじゃないかなって最初は思つたんだけどさ、でももしその油断でわたしと香織が離れちゃつたらつて不安になつて。ちょっと大きさなんだけどね」

『香織』って呼んでくれる、呼び捨てで。

麻里といつしょにいるようになつて、いつしかそう呼ばれるようになつて、そのたびに感じていた深く温かいものが、今になつてゆつくり、そして徐々に滝のような豪快さであふれ出てきた。

「・・・・・・ありがと」

気がついたら、涙が出ていた。

泣いている今のわたしには、周囲の視線すら感じれない。

ただ、率直に嬉しかった。

「ど、どうしたの」

「ううん。何でもない、」めんね、わたしにこうつづく経験今までほんとこなくて

「いや別に謝る必要はないんだけど……ちょっとびっくりして。でも嬉しいな、香織が喜んでくれて。まさかここまで感謝されるとは思わなかつた。いっしきそ、ありがとね

「…………うん」

ストラップを汗にじむ手で優しく包み、わたしはうなずいた。

「明田、アマ?」

金曜日の帰り道、別れ際にわたしは言った。

うん、まあヒマかな。あ、でも年前中ケニアある」「ううぬ、ひどい。じゅううち二つもお祭りハラガビコ、

「そ、うなんだ。じゃあわたしもお皿までクラブだし、終わる時間はほとんど変わらなによね」

一 おお、やいよね

「じゃあ2人で午後からでいいからどこか行かなし?」

モハ、この時  
麻里がわたしを裏切った事は発覚している  
だから

「アーティストの心」

「さあ・・・・・。麻里が決めていいよ」

わたしはこのとき行きたい場所を決めていたけど、ついあと一歩を踏み出しができず、話しの流れをあくまで自然に、自然に望む方向へもつていいくことにした。

「麻里の行きたいところ？」

「そりやあやつば、旅よ旅。電車乗つて遠くいつて・・・・・」

ヤカセ、かいやか 桜かり今おい通り止められでるの かか

たもんじやないの。だから、でもるだけ無駄な出費つてこりやつは  
したくないの」「

「ああ分かった、この前のテストでしょ。そりやあの点数じゃねえ。  
自分が汗かき働いてかせいた金を、ただのおバカさんに使われるな  
んて全く、たまつたもんじゃないわねえ」

「……………」アーニング、アーリーが叫びた。

「そんな、冗談なんだから怒らないで」

「だつてマジでやばかつたんだもん、テスト。なのに『大丈夫だよ、これくらい』の慰めなしにバカバカばっかり言われて。言われたほ

うはたまんないよ

話そてる。

出来れば、このままそれでほしい。

でも本当にそれたらわたしは壊れてしまう。ただでさえ、今我慢の限界なのにこれ以上耐えるようなことがあつたら、わたしは何をするか分からぬだろ？

「はいはい、『めん』『めん』。特別に謝るからかわりに香織が場所決めていいよ」

思わず迷つた。

チャンス、というものをわたしは自ら逃す性質なのかもしれない。もしくは変な優しさがあるのかもしれない。この前起こった事件、それをきっかけとして麻里を本気で恨んだ、はず。なのにまだわたしは麻里を許している。ひどいことをした麻里なんだから、どうなつたつて構わないのにわたしは躊躇している。

どうしようもない感情が体をかけめぐり、わたしは途方に暮れ遅刻した昨日の日のことを思い出していた。

結論から言つと、麻里はわたしをだましていた。

そしてそのせいで、現在わたしも麻里をだまそうとしている。

そもそも孤独なわたしが、そうそう良い人生なんて送れると考えていたところから大間違いだつたのだ。おそらく、わたしは前世ひどいことをしたのだろう。じゃないと、こんなに苦しむ理由が無い。最初から疑つておけばよかつた。麻里が不自然なほどの笑みでわたしに声をかけ、友達になろうなんて誘つてきたことに対して断つておきさえすれば、わたしは引き続いていじめられていただろうけどそれよりももつと辛い気持ちを味わうことまずはなかつた。

「ねえわたしのルーズリーフ知らない？」

昨日の夜、カバンに入れたのに。

雨が降る予告をしているかのよつた薄黒い雲が空をおおつ。休憩時間トイレに行つて帰つてき、授業開始のチャイムと共に教科書等を準備してたら、横に薄い青の線が等間隔でひかれた、縦の端にずらつと穴が並んでいるあのルーズリーフと呼ばれる紙が一枚じやなくてまる」と、全部なくなつてゐることに気づいた。買ったばかりの紙。お小遣いピンチのときでも生活必需品は買わないといけない。しょうがなく105円出して買った、貴重な紙。それが無くなつて、少しあせつた。

いくら探しても見当たらないから、わたしは麻里に聞いたのだ。

「そんなの、知らないよ」

わたしの問いかけに麻里は冷たく答えた。

「でも・・・・・昨日ちゃんと準備したんだよ。それに・・・・・

・そう、朝学校に来たときあれ使って宿題やつたんだから。絶対。、これは確信持つていえる。だから、学校のどこかにあるはずなの。

ねえ、本当に知らない？」

「さあ。分かんない。やっぱ忘れたんじゃないの」

数学の先生は特に口うるさく、生徒に對して厳しいからなのか、麻里はわたしが後ろを向いて話しかけているのを迷惑そうにしている。その証拠に、麻里の顔は無関心に満ちていた。

こんなにも麻里が素っ気なかつたことなんて今までにあつただろうか。

聞いても麻里は答えてくれなさそうだから、わたしはあえて黙つたまま前を向きなおし、先生が黒板に書いていく宿題の答えを丸つけのできない右手で持つ赤ペンを呆然と見ていた。

そして、

「やつぱり忘れたのかな・・・・・・」

と心の中でつぶやいた。

わたしの本心では、そんなことはない、そう否定していた。でも最終的にきつぱりと否定しなかつたのは、やっぱ完璧な自信なんてわたしには持てなかつたからだ。

それからなぜか、1週間に2回は物がなくなるよになつた。それも決まって学校にいるときで、家の私物なんかは使つたままそちらへんにほつたらかしにしていても容易に見つかるくらいだつた。といつても、わたしはそれほど片付けが苦手じやない。使つたら元に戻す、これくらいはわたしの中で当然のことだつた。

なのに、物は持ち主から逃げるようにしていなくなる。あまりにも運が悪いとしか言いようがないくらい、物がリズミカルに消えていく。わたしは不思議に思いながらも、何かわからない未知数以上の怖いものが動いていることを、このときまだ感じていなかつた。

そんな不安の中1ヶ月経つて、わたしはやつとあることに気づいた。なくなるものはいつも買つたばかりの新品なのだ。だからこそわたしはしようがないか、と行方不明の私物に對して簡単にあきらめることができず、少しあせつてまで麻里に聞いてまで探していたのだ。最初に紛失したルーズリーフだって、なくす前日に購入した春のに

おいがするくらい新しいサラサラの紙だつたし、その後行方をくらましたのりだつて、ちょうど中身がきれで買った3日後のことだつた。キャップをまだ一回も外されることなく、購入者の元から消えたのり。寂しかつただろうか。もしかしたら、のりはそれを望んでいたのかもしだれない。

じやあどうして、逆にあれは無くなつてくれないのか。中傷のことばが水で洗つたつてこすつたつてどうにもならない、わたしが一番辛かつた時期をそのまま表現している教科書などの、どうせなら破つて深い沼に捨てたい物が、きれいなぐらしさつぱり残つているのか。

わたしはもしかしたらいじめが再発したのかも、わたしにお金を無駄に浪費させようとしているのかも、そう一瞬疑いもした。でもそんな風なやり方で人をいじめるなんて話聞いたことないし、それに物が無くなつたら誰かに借りるか自分で買つかのどちらかで補えばいいから、悩むほどのことでもなかつた。

ただ、あれから麻里はわたしに対しての接し方が激変していた。お互いクラブ活動の無い日、「帰ろう」とわたしが誘つても麻里は、用事があるから、ちよつと無理、今日はそんな気分じゃないの。そればっかり。

そしてとうとう、裏切りの日はやってきた。

「…………うそ

麻里からあのストラップをもらつた1ヶ月半後。  
無くした物の数合計10個を突破したこり。

11月15日水曜日。

わたしはたまたま体調不良で遅刻して、3時間目のはじまる直前に学校についた。3時間目は確か音楽のはずで、麻里を含む2年5組の生徒はそのとき全員音楽室にいるかもしくはそこへ移動中のはずだった、普通なら。

なのに、

「うそ…………」

教室で麻里が。

麻里がひとり。

たつたひとりで、わたしの机に座つていた。

麻里、何してるの、授業遅れるよ、行かないの。

そう声をかけようと口を開きかけたら、全身が硬直するくらいの事実が分かつて、わたしは、伸ばした手をとっさに引っ込んだ。

麻里の、黒板に向いた麻里の背中が、不気味に曲がっている。氣のせいかもしれないけど、目は無色。ひもを引っぱつても点かない電気スタンドみたいに、力の無い目。背もたれとお尻をおく部分でできた直角を、半回転こっち側に動かしたときに見て現れる長方形の隙間には、麻里の足が入つている。

生きている人の目とも死んだ人の目とも違う何かが麻里の無色な瞳には映つていて、わたしは怖くなつた。

それだけじゃない。

ただそして、座つてゐるだけじゃなかつた。

麻里、わたしの買ったばかりのシャーペンを筆箱から選び取る、自分の胸ポケット、そこに、忍ばせている。

わたしは後ろを向いた。

違う違う、嘘だ嘘。風邪だ、風邪だ、風邪のせいだ、朝から響いていた頭の痛みのせいで見間違えた光景だ、見間違い見間違い。でもそうじゃなかつたら、わたしは見てはいけないものを見たことになる、どうしよう。

後悔とあせりがあさがおのつるのように絡み合ひ。

わたしは再び 教室を見た

卷之二十一

いくら風をこらしてみても、さき見た景色は全く改善されることなく、といって悪化しているわけでもない。

それが逆にわたしを不安の縛でしばりつけた

きゅうくつだ。

しばらく驚きで呆然と見つめていたら唐突に、麻里は消しゴムを筆箱からむしり取るようにつかむと思いつきりたきつけた。きれいな直方体の新品の消しゴムはかわいそうなほど無音で、弾むテニスボールよりも不器用な虚しい無音で床からはねかえった。最後には、わたしの足元に波線をえがきながら転がってきた。

なんだか悲しくなつた。

麻里を見るかわりに、涙を流すかわりに、うつすら汚れた消しゴムと田の端で上靴を見ていると、自分のちっぽけさと弱さを痛感してしまう。わたしが惨めで情けないから、こんなことになってしまったんだと思つてしまつ。

「おせよひ市村や、

「元たる」

無意識に出た大声は長い廊下に寂しく反射して、となりの教室から  
流れてくるざわめきと食いちがいながら、違和感を残して調和した。

ՀԱՅՈՒԹՅՈՒՆ ԵՎ ՀԱՅԱՍՏԱՆ

心臓の音だけが耳に入っていた。

ドクンドクンドクン、鼓動のはやい音に頭痛がした。

どうしたの市村さん、何かあつた？

それよりも大丈夫？熱があるんじゃないの？

学林伝記が「いにしへ」

別に寂しくはないから一か月。

たかにわたしの「」とに氣にせずに 早く帰<sup>タモ</sup>るかしよ

市村さん

表題へ笑みをつかずて、一る林里の赤いく

震え上がらせる。それにこゝる麻里はまるで本物の麻里じゃないようだつた。

卷之二十一

「  
·  
·  
·  
·  
·  
· 麻里？」

「わたしがあんたを市村

を渡辺さんって呼ぶのよ」

麻里に言われて初めて麻里が、わたしを市村さん、と改めた言ひ方で呼んでいることにやつと初めて気がつく。チクチク先のどがつた針が、心をピップッと、傷を見るのも嫌になるほど痛々しさで突き刺した。

市村さん れなしを渡さんて呼んで

「どうして？ そのほうがいい

「どうして？ そのほうがいいじゃない。変にわたしばつかりさん付  
けで呼ぶより、揃えたほうが一体感があるていいじゃない。あ、誤  
解しないでね。別に今までの関係を否定するわけじゃないから。そ  
れにわたし、これからも市村さんと仲良くしていきたいの」

「言つたぢやない。あの赤と青のストラップをお互い持ち続けていたら、二人が離れることはないって」

「・・・・・」

「わたしが思うにあれは約束だと思つんだよね。市村さんがあのストラップを受け取った時点で、わたしと市村さんは何があつても離れちゃいけないって、約束したんだと思うの。だから市村さんはわたしにはむかっちゃダメ。幼稚園のときに習つたでしょ？ 約束は守らないといけないって」

「・・・・・あのストラップもうそだつたの。

わたし、本当に嬉しかつたのに。

涙がでるくらい嬉しかつたのに。

全部うそだつたの・・・・・。

全部わたしの、一人よがりだつたの。

「わたしの言つ事に間違いはありますか、市村香織さん」

「・・・・・ねえ」

「発言ですか、どうぞ」

「ねえ、どうして」

「質問ですか。許可しましょ、」

「どうしてこんなことしたのっ！？」

心でぞわついている不安や怯えなんかの細かい粒の土が、少しづつ集まつて粘土のようにねられできた丸い泥団子状の感情の硬い塊が、のどを不快に鳴らしながら口からはき出た。

塊をよけきれなかつた様子である麻里は、目を大きく見開き一歩下がつた。しかしそれもほんの一瞬で、すぐに麻里は、不気味にわたしを見下ろした。

「ふふん。変なこときくのね。どうしてこんなことしたの、か。決まつてるじゃない」

「決まつてる？」

「つざいからよ」

心臓が破裂した。

そう感じるくらい、胸が痛かった。

麻里を本気で怖いと思った。

どうしゃったの麻里、何かあったの。

聞こうにも聞けない。

「どうしたあ？ 傷ついたような顔してるの？ あ、もしかして気づいてなかつた、自分のこと。それか分かつても見て見ぬふりしてたとか。そりゃあ傷つくよね。でもこれが現実なの」

怖い、麻里の変化が恐ろしい。

「まだ受け入れられないの、最悪にうまれた自分を。じゃあ教えてあげる、あなたはいないのよ、この世に。いても存在しないの。なにいちいち学校に来て一日中ずっと暗く座つたままで、これじゃあいてもいなくとも同じじゃない。まあ、わたしはどちらかというとそんなあなたを笑つてけつこう楽しんできたんだけどね。だからわたし個人としてはいてくれて正解だった。たぶん皆もそう」

「だったら、」

「でも人間つてかわいそなのか好都合なのか、とつても飽きっぽくつくられてるのよ」

「・・・・・」

「それにしても、あなたバカねえ。わたしの本心に気づかないなんて。人と接しないぶん人を觀察してるとと思つたら。どうやら才能や素質はゼロもない、マイナス以下のようね。穷つてこる。全てにおいて穷つている。何の取りえもない」

心にズキンときた。

「いじめて嫌でもこれないようにならうつて。もう名前も忘れちゃつたけど入学してすぐにへこたれちゃつて来なくなつた、あいつみたいにさせよつて。いつのまにかクラス全体でそう決まったのに」

不登校児の山か川かどちらかの字が名前にある子の顔が、おぼろげながらも浮かんだ。そのとき、少し心に新たなものが芽生えた。

「ねえ、なんであきらめなかつたの。簡単にあきらめちゃえば、あ

なたも永遠に楽でいられるし、わたしたちも悩み解決で一石二鳥だつたのにな。どうせ学校に来たつて苦しいだけだつたくせに、なんでわざわざ来たの？　あ、もしかして自虐的行為に走つやつたとか。いくらなんでもそれはな・・・

「負けたくなかったから」

言つていた。さつきまで足がビクビクしてたのに・・・・麻里の言葉を無意識にやえきつ、言つていた。

もはや自分をコントロールするは不能だつた。田の前の視界がぼやける。

頭がギンギン痛い。

くらくら田畠がした。

「ま、負けるもんたまといへりへり負けてるじやん」

「違つ・・・・・」

「ビ、ビ、がよ」

「香織の言つてる負けと、わたしの言つてる負けは・・・・違つ、全然ちがう。そりやあわたしも一度は負けたと思つた。元々勝つてるなんて、考えたこともなかつた。でも、やつぱり悔しかつた。たぶんあのとき麻里がわたしに話しかけてこなかつたら、わたしはみんなに仕返してたかもしれない。だから

ふらふら揺れて倒れそうになりながら、自分で田つきが怖くなつていくのが感じとれた。酒に酔つ払つたら、こんなふうになるのだろうか。

「もしかすると、わたし壊れちゃうかもしれない。なんだか自分が自分なんかからない。今まで復讐は行動になんてできるわけなかつたけど、もしかしたらしけやつかもしれない」

「こきなり何を言つのかと思つたら、そんなこと。あまりにもぐだら、」

「注意しといへ」

「何を」

「わたし、麻里を傷つけたくない。でもね、『めん

「・・・・・」

「もう止められないの、我慢の限界なの」

分かるわよね、この気持ち。

複雑なんだけど分かってしまつ。

やつちやいけないことほど、人は簡単にできてしまうの。  
悪いことをするために、勇気なんていらないの。

麻里がやってきたことだって、それと同じ。

「だからといって、わたしと麻里の関係は変わらないよ、いつまでも。  
も。だって・・・・・」

窓から入りこむ風が、机上のプリントを吹いた。

「このストラップがつないでくれているから」

香織の手にある携帯とひもで結ばれた水晶、ストラップの水晶は怪  
しきうつすらと・・・・・そして戸惑い気味に、光を放った。

## 第2章・3話（後書き）

僕自身、この展開はちょっと無理があるんじゃ、と思つていつもあります。

が、なんとか最後まとまるようにしますので、  
それまで時間がかかるかもしませんが、  
よろしくお願いします。

わたしが一つだけ、麻里に頼んだこと。  
市村さんって呼んで欲しくない。

いくら麻里がひどいことをしたとしても、わたしを市村さんなんて初対面の面接官から話しかけられるみたいに、それだけの関係として安易に呼んで欲しくなかつた。もちろん香織、と気安く話しかけられるのも抵抗はあつたがまだ耐えれた。

本心を言うと、わたしは麻里を手放して陽気になるほど心は夕焼けの和む温かさで満たされていない。わたしは、麻里がいなくなると、必然的に孤独になる。冷蔵庫に入れたばかりの麦茶より生ぬるい、思わず寒氣のする温度で独りになる。だからこそ、どんなことがあっても麻里は大切にしよう。そう心に刻んだのだ。なのに復讐心は、全く消えようとしてくれない。

「香織はどこに行きたい？」

「え、あ、何？」

「だから、香織の行きたいところは？」

「…………デパート、かな」

「えつ、ナ、ナンデ？」

「理由なんて、ないけど…………いけない？」

「いや別に、ただ、わたしは、あんまり買い物とかしないから」

「でもこの前ストラップくれたじやん…………。買い物好きじゃないと、普通あーいうのにお金は使わないよ」

言つた瞬間、あ、失敗した、そう思つた。

いくら麻里の今までの言動全てがうそだつたとしても、ストラップだけは傷つけちゃいけないような気がしていた。あれだけは、まだわたしは持つっていたからだ。それを、あーいうのにお金は使わない、なんて。完璧な失敗だ。今流れている重い沈黙を含めたら、失敗を通り越したものになる。

「じゃ、じゃあいいよ、『パート』で

氷のように固まつた空気をもみほぐすみたいに麻里はそう了承した。

「うん。じゃあ明日クラブ終わつたら校門で待ちあわせね」

「ああそうしよっか

「うん・・・・・また明日ね」

「うんつ・・・・・あのさ香織

「ん?」「

「わたし氣になつてたんだけど」

「何が」

「今さらなんだけど」めんね

「えつ

「だつて、わたしひどいことしたじゃん。香織はわたしのこと友達つて思つてくれたのに、わたしはそれどころか人間以下みたいな扱いしてて。拳句の果てにはいてもいなくて同じ、なんて言つちやつて。わたし、香織のこと最低みたいな言い方で傷つけちゃつていきなり何?

謝つたくらいでわたしがあなたを許すとでも?

もし本氣でそう思つてゐるのなら、わたしはたぶん許さないだろうけど憎みもしないだろう。だつてわたしは、今も麻里を嫌いだとは言い切れないし、恨んでもいない。でも完全にわたしが傷ついたぶんの苦しみを麻里に味わつてもらわない限り、死ぬまで一生気がすまないだろう。でもどうしてだろう。何か、いけない気がする。このまま麻里に復讐することを、ためらつてしまふ。

ポケットに手を入れる。

指先がストラップを感じる。

「大丈夫だよ。わたしだつてこのまま適当に中学卒業して高校入つてたぶん大学行つて会社入つて結婚して年金生活、最後は苦労して死ぬ、なんて。そんなの絶対いやだから。せめてわたしが平均でいい。わたし以上に辛い人とわたし以下に辛い人が同じくらいいてほしい」

このまま麻里だけハッピーハンドなんてありえない。

そう望むからには、わたしの進む道はたつた一つしかない。

完璧な復讐。

思いだけじゃ変わらないから行動で心を表す、そういう復讐。

じゃないとわたしは、これ以上先に進めないから。

麻里に復讐なんてほんとはしたくないけど、ここですっとさまでよい苦しんでいるのはいやだから。

ごめんね、麻里、わたしのわがままに、付き合わせちゃって。

決して麻里には聞こえないであろう心の声で、わたしは、道に転がっている丸い小石をつま先で小難しそうにいじる麻里に向かって一応、言つておいた。

復讐の作戦はこうだ。

わたしと麻里が制服を着てデパートに行く。次にわたしが万引きをする。ここで重要なのはわざと店員に見つかるくらい、のろまに商品をバッグに入れることだ。かなりの確率で店員に万引きを目撃される予定であるわたしは、予定通り店員に見つかりそして全速力で逃走。どうにか上手く店員から逃げきったであろうわたしは、一刻も早く麻里に万引きした商品をプレゼントだと適当に言つて渡し、デパートを何事もなかつたかのように去る。おそらく店員は制服と学校を照らしあわせてわたしの通う学校にたどりつくだろうから、そのときになつて万引きされた商品を持つている麻里は犯人の疑いをかけられるだろう。

もしかしたらこれは作戦じゃないのかもしれない。ていうか、誰が見ても作戦というよりはアニメの悪役なんかが密かに夢見る世界征服、というのに近いような気がする。そんなことどれだけの権力がある人にだつて出来やしないし、おそらくしようとすると人だつていなかろう。それくらい、成功率の低い希望なのだ。

失敗してもいい。正直、わたしはどうでもよかつた。自分が何をしたいのかさえ不明だつたし、目的すら分からぬ。ただ、想像力のないわたしにはこれが精一杯だった。麻里を痛めつけたい、苦しめたい、でもどこか違う。こんなことしたって、意味の無いように思える。

それでもわたしは止められなかつた。

水晶はまだ光つている。あの不気味に、戸惑いながら光つたあの状態のままで残つてゐる。だから、止められない。

クラブは休んだ。学校に来ているのに休むなんて、どうかしているだろう。自覚しながらもわたしはどうしても、この複雑な気持ちでクラブ活動に参加してしまつたら、このまま麻里に会いたくなくな

つてしまふような気がした。

「今日、わたしは、万引きをするのかあ」

口に出しても実感がわかるのは、わたしが今の中学生にしては珍しくコンビニもほとんど行かず制服もダラダラ着ず校則ですら守つたりする、万引きなんて犯罪とは無縁の生活をおくってきたからだろう。

振り返ればわたしは真面目すぎたのかもしれない。

勉強やスポーツクラブに励んでいたとかいわゆる品行方正という性格ではなかつたけど、人並み以上は努力していたと思う。いじめられていたつて、つまらないという理由だけで学校を欠席遅刻しまくつている人よりは確実に多く登校していたし、誰も見ていないところで悪事らしきものをはたらいた事もなかつた。

じやあどうしていじめられていたの？

もう終わつたことなのについて思い出してしまう。

わたしが浮いていたから？

ともだちがいなかつたから？

誰かに問うて

「そうじゃないよ」

と慰めて欲しいけど、実際は自分の中でもう答えは分かりきつていって、これは事実でありまた認めないといけない弱さなのだ。

といったつてわたしは自分に負けているとは思わない。

ただ、自分に勝つていたとしても他人には負っている。

これだけは認めたくなかった。

でも、今までの経験で嫌でも思い知つたことだつた。認める以前に

受け入れないといけない事実。

悔しい。

思わず唇を噛む。

うつすら血の味がした。赤い色つてこんな味なんだ、と思った。

瞬間、わたしはこのまま突き進んで大丈夫なのだろうかと、足がすくんでしまうくらいのいつか覚えた不安感に襲われた。

そのとおり、雷の音がした。

「ロロ、ロロ」と空気を揺らしたあとピッカーンと空に亀裂をいれる。

空は一面暗い色で染まっていた。

幸いまだ雨の降る様子はなかった。でもいつ降ってもおかしくない、怪しい空の色だった。

あれから十分後、空はますます濁っていた。

麻里はまだ来ていない。わたしはといふと、麻里を待つてゐるのか待つてないのか分からなくて、できれば来て欲しくないとも思つてたし、来たら来たで何かが変わりそうで、もどかしかつた。

その時だつた。

「香織つ」

呼ばれた。

振り向く。

「おまたせえ。ほんとはもうちょっと練習する予定だつたんだけど、なんかこの天氣でさあ。ランニング？そんな感じのやつをしてたら雲がこんなになつてて。元々テニス部は部員も少ないし遊び感覚で入部した人ばかりだつたから異議無しで練習中止、つて決ましたの」

笑顔すぎる。

こんな素敵なお顔を持つ麻里を、裏切つていいのだろうか。  
いや、わたしはこの笑顔の持ち主に裏切られたのだから、仕返しきていい権利は充分にある。

なのに・・・・なのに心が締めつけられる。

悲しい。

復讐でしか事を片付けられない自分が悲しくて憎い。

「良かつたあ。じゃあ早速デパート行かないと。すぐ本格的に降りそうだもんね」

それでも感情を押し殺して、わたしは震える口で言つた。

「え・・・・・行くの？普通やめない？こういう時つて  
麻里はわたしを信じられない様子でながめた。

「そうなの、かな。でも、屋内だから心配ないよ。それに、家に帰る途中で降つてくるよりここから近くのデパートに・・・・・雨

宿りつぽく寄つたほうが、ひまつぶしにもなると思つし。それにもしかしたら通り雨つてこともあるし

自分でもめちゃくちゃなことを言つていると分かっていた。

なんとなく矛盾していいるような気がする、しかも雷が珍しいくらい堂々と鳴つているのにいちいち午後の予定どおりに動こうなんて提案するなんて。違和感がありすぎる。でもわたしはどうしても後にひけなかつた。ひきたくて、そんな勇気わたしには皆無だ。

「ねえ、こんなこと話していい?」

肩にポツッと水があひて、服にじわりと染みこむ感触がした。

「降つてきちゃつたよ

麻里がそう言い終わつたころにはもう土砂降り。

ザーザー降る雨のせいでわたしの前で立つ麻里の姿がまるで、霧に隠れてしまつたみたいにはつきりと見えなくなるくらいの大雨だ。

水の長く細い、そつめんのような糸でできた白いカーテンで隠れた自らの下半身。麻里がこの前言つていた『いるのにいない』というのはまさにこのことだつたのかと、初めて首を縦に振つた。時間だけが過ぎていく。

雨の勢いが強くなるにつれて時間のスピードも速くなる。

いつのまにか自分が酸性雨でドロドロになる像のようになつてしまふような恐怖感を覚えていたわたしは、内心あせつていた。

「香織……かさ持つて、ないよね」

わたしの肩から腰のほうまである、水色のショルダーバッグの中に折りたたみ傘なんかが入つていてるんじゃないかと考えたのか麻里は、少し遠慮がちに聞いた。

わたしはあいにくそんなもの入れた覚えはまったくといつていいほどなかつたけど、即座に「ない」と言えばますます雨が止む率が減りそう。自然はわたしたちに味方してくれない。

もう嫌つ、そう叫びくなつたわたしはバッグの中身が濡れるのを感じることなくファスナーを開けにし、ガサガサと無駄に多い小物をかきわけ麻里のお目当ての品を必死に探した。こうして心の中

で居場所を求めて暴れまわる感情を抑えた。

しばらくしているうちにそれらしきものがないと認識してもわたしはあきらめきれず、仕舞いにはバッグを逆さまにして中身を全て道に吐き出していた。小物と道がこすれたりぶつかり合ったりして出る様々な音が、心を虚しく刺激する。

もう泣いてしまおうかとも途中で思った。  
でも一つ一つきのむかない動きをする手でチョックしてゆづりに冷静になつた。

無いと分かつているものがいつのまにか入つてゐるなんてことが起ころわけもない。

もうしようがない、わたしはこいついう人なのだ。

川のように水たまりが連なつてゐる道にひざをつく無様な格好で、「じめん。無かつた」

と言つことしか情けなくともできなかつた。

わたしは一度、心の中で恨むことに挑戦して結果挫折したことがあるけれど、これは挫折といつぱりはしようがないことのよつたな気がした。

性にあわないことはしないに限る。

もうわたしは復讐など、どうでもいいと感じていた。  
そしてそのとき、

「行こうデパート」

麻里は怯えているわたしに気づかずそう言つた。

「ほ、ほらわたし、こつからだと家よりデパートのほうが近いからね。だから、別に香織のためとかじゃないから。気にしないでね」「う、うん・・・・・・」

適当にうなずきながらも内心わたしは麻里に感謝していた。  
わたしをいじめてきた、麻里に感謝していた、心から。

といつてもわたしの熱い復讐心をふたたび燃やしてくれたからではもちろんそうでなく、ただ、ただ・・・・・わたしは今まで同じ年代の子の家に遊びに行つたりいつしょにビーチに出かけたりとか、

そういう経験が一度もなかつたのだ。お父さんもお母さんも一人っ子だつたため、いとこ、という存在がいなかつたせいでもあるけど、何だかんだ言って一番の原因はわたしの雰囲気、性格にある。人を寄せつけない独特の暗い雰囲気と、人とうまく付きあえない不器用な性格。自分で言うのも変だけど、この二つが合体すれば最強だ。なかなか誰もわたしに関わろうとしてくれない。

事実そうなつてきたし、今だつてそうだ。もうこれは何度もいうけど認めている。でもやっぱり我慢してきた。普通とちがう人生を拒んでいた。だいたい普通つて何なんだろうと、真剣に考えていたほどだ。

でも、やつぱり普通の第一条件は友達がいることだらうなあとどいかで決めつけていて、いつのまにかわたしの中で麻里と仲良くなっていることが幸せへの第一歩、という思いが強くなつていた。

いくらひどい麻里でも、いないといいでわたしは困る。まだ自分の中も分からぬけど、これだけは言える。

「ジャジャーン」

下を向いていると突然、麻里が嬉しそうに言った。  
びっくりして首を45度の形に傾ける。

麻里の手にあの傘がある。くるっと杖のように曲がった部分のある、折りたたみなんてコンパクトすぎる道具じゃない、柄が独特の形であるあの傘を麻里が持つていてる。

「ずっと持つてたんだよ。なのに香織、全然気づかないからおもしろくなつて隠してたの。」「めんね、めん。ちょっとふざけたつもりだつたのに、香織の荷物、全部ぬらすことになつちゃつて」「一瞬にして、わたしの全身は軽くなつた。

こうしている間にも制服は濡れているのに、それすら感じさせないほどカラッとしていた。

「ううん。大丈夫。ていうか、早く差そつよ、持つてるんなう。もうずぶ濡れだから・・・・・意味ないけど」  
顔を見合させてわたしと麻里は微笑んだ。

そして麻里はオレンジの傘をバツと差し、入れ、とでも促すように肩を首のつけ根のほうに縮こませ、傘の下に広がる小さなスペースの左半分を空けた。

わたしはゆっくりとそこに入った。テニスラケットの入った長い麻里のスポーツバッグで、わたしの左肩はその狭い空間に入ろうともしてくれない。それでもわたしは、半分ポッカリと空いた空白を最大限度に活用できるよう優しく埋めるよう努めた。せっかくの麻里の気持ちを、無駄にしたくなかった。

止まない雨はない。

雨は幸福の一歩手前。

そう信じて、わたしは麻里と共に田の前に広がる長い長い道を歩きはじめた、恥ずかしいけどやつとそうなれたのかもしれないしなかつた。

「なんか、わたしたちおかしいね。デパート行くだけでこんなに色々喋りあわないといけないなんて」

麻里の言葉に、純粋で素直な笑みが思わず、頬にこぼれた。

その日は学校全体が騒がしかつた。

騒がしい、といつよりかは全体としておしゃべりの種類が違つていいような、いつもなら他愛のない話で盛り上がつているはずの生徒たちが、今日はありがちじやないようでありがちな話についつい興奮していた、といった感じだ。でもその興奮を簡単には表に出すことはさすかにはばかられるようで、生徒たちは裏でおどる感情を押し殺している。声を縮めながらも拡大しつつ話すいやらしいその光景は、わたしを震え上がらせた。

息苦しい。

そう感じた瞬間、あつ、麻里はどうだろ?、思つて辺りを見回すと麻里はみんなから少し距離をおいて自分のいすに座つていた。

「麻里一体どうしたの?」この騒ぎ

周りのヒソヒソ声に嫌でも合わせないといけない気がしてわたしは半分息だけで、そう麻里に聞いた。

「・・・・・万引きらしいよ」

麻里は言いたくなさそうにうつぶやいた。

急に、心臓の鼓動が速くなつた。

あれ以来わたしは『万引き』といつも言葉に敏感になつっていた。そのせいからかそれとも他に自分でも気づかない理由があつたのか、麻里のつぶやきは臆病なぐらじ小さかつたのによく聞こえた。

「万引き?」

斜め下を向いている麻里の表情は見えないけど、確実にいつもとは違うものが、麻里の中には秘めていた。

話題のテレビの感想批評、昨日起こつた出来事の報告、そんな話より万引きという犯罪の話に夢中になつてている生徒に対しての奇妙さえも、一度あつた食欲が風船から空気が抜けるみたいに無くなつたときのあのどかしさで消滅した。

「万引きって……どうしたの？」

一旦教室から出、教室よりは空気のやわらかい誰もいないトイレでわたしは聞いた。電気の点いていない薄暗いトイレは、まるで小窓からかるうじて入つてくる陽の光で生きているよう。

この前自分が万引きをしようとしていたせいか、実際したわけじゃないのにもかかわらずわたしは不安になり、顔や手から汗があふれ出て、息が上がっていた。

あまりにも静かすぎる。ドアをピタリと閉めて隙間を見つけて入つてくる廊下からの小さいかつ大きい、口から耳に伝わる声がここにはきちんとあるのに、静かすぎる。

どこからか風の音が不気味に入ってきて、奇怪な音をたてる。なんとなく声が出しつぶかつた。

「なんで、万引きの話がこんなに学校で、話題になつてゐるの」それでもなんとか言葉を言つたら、

「うん。それがね、駅前のデパート、なんだつて。…………この学校の生徒の誰からしいんだつて。わたしは違うと思つんだけどね」

「そ、それで？」

「うん。わたしは違うと思うんだけど、でもみんな言つてる。この学校の誰かが万引きしたつて。けどたぶん、つていうか絶対つわさだよ」

「うわさ？ ほんとに？ ていうか、うわさでも本当でもいいから、なんでもこの学校だつて分かるの？」

「うん。本當かどうかは、分かんないんだけどね、店員が商品を力バンに入れるところをね、目撃したんだつて、よく分かんないんだけどね。でも・・・・・それで追いかけたら逃げられたんだつて。ただ、誰かがその現場を見てたらしくて、それで、その誰かが先生に見たことそのまま言つたつて、それで・・・・・わたしが立てた計画じゃなく要望だ。でも麻里がそれを話したら、どうしてだか

とても緻密にできた策略のように思えてしまつ。

でも、今の麻里は何かに怯えている。少なくとも、麻里のぎこちな  
いしゃべり方から見て取れた。わたしのほうを決して見ようとしな  
い麻里はこれ以上話したくないようで、また話す力も残っていないよ  
うで、口を動かすほど冷静な感情ではないようで、ただ、黙りつつ  
むいたままでいる。

「麻里・・・・・・？」

そのときちょうどチャイムが鳴った。

瞬間、それを口実とするかのように麻里はわたしを置いて、トイレ  
から駆け足で出ていった。

「まさか・・・・・・。違うよね

麻里が万引き。

想像しただけでも息が震える。

「・・・・・・違うよ、きっと」

友達を疑つたらいけない。

わたしを地獄から救つてくれた友達を、疑つてはいけない。  
もちろん麻里は一度地獄にわたしを落としたけど、それでもわたし  
は麻里を嫌いになれなかつた。つまりそれほどわたしと麻里には深  
いつながりがあるはずなのだ。  
友達は、信じないといけない。

自分の中に新たな決まりごとを作り上げた。でも、わたしは安心と  
恐怖が理性と感情のように葛藤することに慣れていず、ただ、足に  
力をこめて教室へ戻ろうとするだけで疲労感がどつと出た。

「麻里が万引きなんて・・・・・・」

麻里はマンビキなんてしない。

水晶ついたストラップ、を渡してくれたときの麻里のあの笑顔が頭  
の中によみがえって、わたしはしばらくしてどうにか半分だけそ  
う思えたのかもしれないが、

その日の授業は麻里のことを考えている間に終了。

放課後、わたしは職員室で担任の青井先生に聞いた。

「この学校の生徒のだれかが万引きって、ほんとですか」とすると先生は手馴れた様子で、「そんなことはありません」と言つた、わたしの目は見ずに。

「先生」

「どうしましたか?」

「知つてますか、青井先生。嘘は相手の目を見ながらじや言えないんです。たとえ言えてもそれはいつかばれる嘘なんです」キーボードを打つ手がとまつた。

先生の表情も固まっている。

わたしは今しかないと思い、

「おねがいします。教えてください先生」

頭を深く下げたわたしに、職員室にいる先生生徒、全員が視線を向けたのを感じたが、本来他人の視線が苦手であるわたしなのに、このときだけはなぜか全く気にならなかつた。

「なんか分からぬけど、怖いんです。わたし、一回麻里の裏を見ました。麻里のことを知つているから、これ以上悪くなつてほしくない。だから、麻里の事教えてください。お願いします」本心だった。麻里を間違つた道に歩かせたくない、そのためにはわたくし、どんなことでもできる。

「・・・・・ちょっと来て」

先生はそう言つと、わたしの返事も待たずに出た。  
わたしもそれについて行こうとする。そうしたら、案の定視線も一緒に、わたしのところに走ってきた。でもわたしはそんなこと構わず、先生だけを見て歩いた。

先生は職員室を出て廊下をほとんど歩くこともなく、職員室の一いつ

隣にあるドアを開けた。

「入つて」

わたしは言つとおりに、まるで刑事の取調室のような場所につばを飲んで入つていった。

その部屋はなんだか中高生が勉強クラブで大忙し、といつやつとはかけ離れた世界の空間のようだ。とても緊張した。部屋にはシンプルなステンレスの長方形なテーブルが一つ中央に、さらに背もたれのない丸い緑のイスが二つ、テーブルをはさみ向かい合つようにしておかれている。壁は白く床も白い。どんな些細な汚れでも簡単に見つかってしまうやうだった。

「座つて」

先生は奥にあるイスに座つてから、わたしに促した。

本気で怖くなつた。麻里がここにいればもっと怖くなるか全然怖くなくなるかのどちらかだらう、しかしどちらにしても今ここにいるだけで充分怖くなつた。

絶対に麻里は、万引きなんてしていいない。

そう少しでも、1パーセントでも信じていたから先生に聞くことができた。あと数パーセントあるだけでわたしは完璧に楽になれそう。そう感じわたしは麻里にもらつたストラップのついた携帯があるポケットに手を入れ、それを強く握りしめた。

今なら間に合う。もう手遅れなのかもしれないけど、麻里はまだ、わたしの手の届くところにいる、と信じて。

「さつき言ったこと、本当なの？」

しばらくして、先生は口を開いた。

わたしは何もいえなくて、顔をゆっくり上げた。

「だから、さつき渡辺麻里さんが万引きをしたつて……。

そういう言い方みたいだつたから、うん。もし先生の勘違いなら……

・・・・

「違います。麻里は万引きなんてしてません」

わたしは、とうに青井先生の言葉をさえぎつた。

本当にこのまま突き進んでいいのか迷いながらも。

「わたしは・・・・・・麻里をチクリにきたわけじゃないんです。そんなんじゃないんです。わたしは、先生から聞きたいんです。万引き犯は麻里じゃないって、他の人だつて。もうとっくに犯人は見つかって厳しく怒られたつて。そう言ってほしいんですよ。ただ、それだけなんです・・・・・・じゃないとこのままだと、わたし・・・・・・おかしくなつてしまいそうで」

わたしは肩を震わせながら必死に言った。

もうこの日一日で一生分の力を使つたよ。

なのに先生は、

「そう」

と平然でつぶやいた。

ナニカガオカシイ。

さつき感じた恐怖とは違つものをわたしは覚えた。

ここに入つたとき取調室に来たように感じたけど、それは本当だつたのかもしぬれない。

「渡辺さんも同じことを言つたわ。『香織は万引きなんてしない』

つて

足の裏を床につけているのが落ち着かなくてビクビクしてると青井先生は、ため息をついてから言つた。

改めて観察するためがねの奥で光る先生の黒目がある。そこにスース、と麻薬の一時的な快楽と同じなのかもしぬない感覚で引きこまれそうになつて、わたしはそこからサッと目をそらした。

そして、

「麻里がわたしと同じことを言つたって、『いつづけ』ですか」とそのまま先生の方を見ない姿勢で聞いた。

「市村さん、あなたわたしに言つたわよね。相手の目を見てうそはつけないって。そのことが本当なら、今さつき市村さんがわたしに

聞いた質問をわたしは受け付けないわ

「・・・・・」

「これを大人がよく言つ平等といつのよ  
じやあわたしは不公平でいい。

わたしは誰よりも下でいい。

そう吐き出せたらどれだけ楽か想像しただけでも夢心地な気分にな  
つてしまいそう。だからあえて、わたしは弱音を吐かないことにし  
た。

負けたくはなかつた。

先生が言つてゐる意味は相変わらず分からぬけど、それでもやつ  
ぱり自分の弱さを見せたらおしまいだと思うし今まで散々いじめら  
れて嫌でも弱さを勝手につくらされてきた。

どうせなら経験から学んだ知恵はいかしたほうがいい。

それにしても、どうして先生はわたしに対してここまで厳しく接す  
るのである。いつもは差別も偏見もない先生が、どうして急に変わ  
つたのだろう。

「一体何が言いたいんですか、先生」

今度は青井先生と面と向かつて言つた。

目線を強くして、聞いた。

「市村さんに白状してほしいの」

白状する?何を?

「認めてほしの、誘導されてじゃなくて自分から」

・・・・・認める誘導? どうこうこと。

「市村さん、人は変われるのよ。だからお願ひ・・・・・嘘なん  
てつかないで」

わたしづつはつくけど・・・・・先生が目を潤ませるほどウソ  
はつかないよ、ほんとに。

「あの青井先生わたし・・・・

「『万引きしました』」

「・・・・・」

「やがて認めて、市村さん」

「どうしてですか」

先に沈黙を破つたのは、わたしのほうだつた。

「どうして、そうなるんですか。わたしは万引きなんてしていない  
しもちろん麻里だつてそうです。なのに、なんで？　・　・　・　・　・

青井先生は、教師じゃないんですか」

死にそうだつた。すぐ疲れて、死にそうだ。

「友永くんつて知つてるわよね

「・　・　・　・　えつ？」

「市村さんと同じクラスの、友永裕一くん」

知つてるもなにも、友永くんは唯一男子でわたしに暴言を吐いたり  
いじめたりしなかつた子だ。麻里のようにいじめを止めてくれたり  
はしなかつたけれど、それでもとてもクラスメイトから信頼されて  
いて、学級委員の投票も確かに彼にほぼ満場一致で決まつていた。お  
まけに成績優秀スポーツ万能、どこをとつてもすばらしいとしか言  
いようのない人間の見本のような雰囲気を友永くんは放つてゐるし、  
実際テストの点も運動会のリレーのアンカーも完璧としかいよい  
うのないものだつた。まさに、万引きなんてものとは、無縁の性格。  
そんな彼が、どうして万引きの話に関わつてくるのだろう。しかも、  
わたしが万引き犯と疑われている話に。

「あの、どうして友永くん、がこの話に出てくるんですか。だつて  
友永くんはわたしとも・　・　・　・　友達とかそういう関係じゃない  
しそれに、万引きなんてするような人じやないし。たぶん麻里とも  
つながりがあるなんて思えないし、それに・　・　・　・　・

「どちらにしても

青井先生は力強い口調で言つた。

「どちらにしても、渡辺さんには友永くんとの何かしらの関係があ  
つたと先生は思います」

「な、なんですか」

わたしの問いかけにしばらく間を置いてから、先生は話し始めた。

「『香織は万引きなんてしない』。渡辺さんが今日の昼休み、わたしに言った言葉です。そして昨日の朝、友永くんは『市村さんが万引きをしたところを、ぼく目撃しました』。そう言ったのによく、先生の言っている意味が分からなかつた。

いきなり友永くんがこの話に出てきて、いまだに正直困つていた。

「つまり、渡辺さんはあなたの万引きを否定した。なのにどうしてだか友永くんはあなたの万引きを肯定した。あきらかに矛盾しているの。これがどういうことを意味しているか市村さん分かる?」

「いえ・・・・・ただ、その友永くんがどうしてしてもいいわたしの万引きを・・・・・目撃したと言つたのか理解できません。だつてしてもいいことを勝手にしたつて噂されても。とても迷惑です」

「そんなやわなこと言つてる場合じゃないのよ。校長先生も教頭も、すっかり友永くんの言う事を信じてる。そりやそうよね。だつて友永くんは模範の生徒だもの。とても渡辺さんに敵う相手じゃないわ」「あの、先生? おっしゃつてることがよく分かりません」

本当は分かつていた。

簡単に解釈すると、近頃の大人は日頃の行いがよい生徒の証言を信じる傾向にある、ということだ。理由は分からぬけどとにかく友永くんはわたしを万引き犯に仕立てようとしているらしい。それを麻里は懸命に否定してくれている。でも最初に述べたように、校長や教頭は麻里を信じず友永くんだけを信じている。

ここまで冷静にこんな考えができる自分に、述べたなんていう、なかなか中学生の会話で使わない言葉が浮かんだわたしに、鳥肌が立つた。

「この学校は教育方針が厳しいの。それでなくとも万引きは犯罪行為。一般的な公立校でも自宅謹慎が当り前。だからこのまま市村さんが万引き犯、なんていうふうに思われちゃつたら・・・・・お

そらく、いや確實に市村さん

「はい」

「あなたは停学処分よ」

停学。

この一文字は、『死ね』の手紙と同じくらいのダメージをわたしに与えた。

停学、ところはまさに停学だ。

停学になつたらわたしはどうなるのだろうかと考えただけで、背筋にぞくつと寒気が走った。

学校がとりあえず楽しい今、これからしばらく学校に来ることを禁じます、なんて変な紙のようなものを親と共に偶然と立ち廻くす校長室で見せられたら一体どうすればいいのか。親がわたしに失望するのは別にいいけど、この先の未来が心配になる。

不安が渦を巻いて頭をパニックにさせた。

けど、それよりも一つホッとしたことがあった。

たとえ麻里が万引き犯だとしても、いやそんなことはないのだけれど、もし麻里が万引きのようなものをやつたとしても、麻里が罪に問われることはない。ただ、そのかわりに友永くんという模範的な証言者がいるのだからかなりの確率でわたしはこのままだと万引き犯というレッテルをはられ、停学処分となる。

ピンときたようで、ピンときてほしくなかつた。

「ありがとうございます、先生」

迷つた末出てきた言葉はこれだった。

お礼を言つわたしに、先生は無言のまま田で問い合わせた。

わたしはその問いかけに答えた。

「最初先生はわたしに脅すような言い方で話していたけど、でもそれは間違いだつたんだって。やつぱり普段の青井先生は優しいからこういう緊急事態のときも優しいんだって、改めて思った。教師なんだって思った。わたくしより絶対に友永くんのほうが眞面目なのに、わたしどと麻里の言つことを信じてくれて、とても嬉しかったんです。

だから、ありがとうございます、青井先生」

言つ事も冷静で素直だ、素直すぎる。

もしかすると、まだわたしは理解できていないかも知れない。

何の関係もないはずの友永くんに、恨まれるはずのない友永くんに、万引き犯というとても低い位置に自分が落とされかけているということを理解してないかも知れない。

いや、わたしはいじめられて精神的に強くなつた。

これくらいのことだ、負けたりはしない。

いつもでは想像のつかないくらい強気さに、わたしは戸惑つてなぜかとても不安になつた。本当にこのままで大丈夫なのだろうか、ど。「こちらこそ、ごめんなさいね。つい尋問のような聞き方しちゃつて。わたし市村さんを信じてるはずなのに」

「・・・・・」

「言い訳させてもらうと、わたしはいにくまだ教師5年もやつてないから、生徒の心なんて分かつてゐるようで分かつてないのよ、こればっかりは自分でもいけないって思つてるんだけどね、なかなか直せない。それにわたし、生徒はみんな同じだと思う。だから、友永くんのことも信じてる。もちろん渡辺さんがことも市村さんのことも。わたし誰を信じればいいか、どうすればいいか分からなかつたの。だから、100パーセント市村さんが万引きを否定できる意思を持つてゐるのかなあつて、それを確かめようと思つて。それだけだったの・・・・・それだけだったのに・・・・・けつこうきつい事言っちゃつたりして。本当にごめんなさい」

青井先生は頭を下げた。

「せ、先生。やめてください。それよりも、どうにかしないと。誰が本当の万引き犯なのか調べるんじゃなくて、この学校の生徒は万引きなんてしないっていう決定的な証拠を見つけるんです。そうすればわたしの無実の罪も晴らされるし、学校からもややこしい問題がなくなる。完璧じゃないですか」

奇妙なくらい頭が冴えた。

自分が天才的な弁護士になつたような気がした。

本当に、いつからわたしはここまで楽観的になつたのだろうか。あまりにも不自然で、そう疑問に思つた。なんとなくわたしの楽観さは、今にもはちきれそうな感情を抑えようとする必死の樂観さに思えてしうがなかつた。

自分に聞く。

「このままで、あなたは大丈夫ですか？」

翌日、麻里は学校を休んだ。

その日季節は12月でもうすぐ冬休み、昨年新しく取りつけられた暖房がはたらいて教室の中は外よりも暖かく、冷たい感情も溶かしてしまいそうだ。

そんな中、青井先生の顔は心配そうに青ざめていた。

「渡辺さんは風邪でお休みです」

と先生が言ったときも、

「青井先生こそ風邪なんぢやないですかあ」

と生徒の一部がからかつたくらいだ。

わたしはその理由がだいたい分かつていただけれど、あえて分かつていないように自分で推測を押し殺した。

ホームルームが終わって生徒が授業の準備を始めるのを見てから、青井先生はわたしを手招きして呼んだ。

「実際は渡辺さんからは何の連絡も来てないの。お家のほうに念のため電話したんだけど、誰もでなくてね。渡辺さんの家共働きだからそれも当然なのかもしれないんだけれど。なんか、不安なのよね。こう胸の辺りが騒ぐつて感じかな」

そう心配気に青井先生は言った。

耳打ちされて、先生の声で震える空気がそのまま耳に入つてきても、それでもまだわたしは、危機感を感じていなかつた。いや、感じないよう努めていた。

実はわたし、学校に登校してからずっと、一つのことに対してもばかり考えていた。だから行動も思つことも全て、その執着する事柄にプラスになるものかマイナスになるものかしつかり判断してから口で言い、心で感じるようになっていた。

「このままで、あなたは大丈夫ですか？」

いくら聞いたつてまともな答えが返つてくるはずない。

自分に優しく接したところで、どうにかなるわけもない。  
気づいたらこう、悲観的になつていて。

感情の浮き沈みが昨日から激しい。

こんなのを、多感期っていうんだろうか。

この日の最後、3学期に予定されている席替えまで待てないとの生徒の声をうまく静めることができなかつた青井先生は、急遽くじを作り始めた。しばらくしてできた、袋から取り出した番号と同じ出席番号の人気が現在座つている席に移動する、という簡単な仕組みのくじびきを使って、わたしたちは完全にどこになるか全く予測不能の席替えをした。

結果、わたしの隣は友永くんで、斜め前は麻里になった。  
麻里が休みということでわたしが麻里の代わりに引いたのだが、まさかこんな偶然あるのだろうか。いや、これは偶然じゃない。被害者、弁護人、警察、そういう身近な存在ながらも対立している複雑な関係になるよう、わたしたち三人はコントロールされていたのだ。  
「渡辺さん、どうしたのかなあ」

ため息をつくように友永くんは、空いた麻里の席を見て言った。  
間近で聞くとより透きとおつている声は、たとえどれだけ残酷な言葉さえも慰めの言葉と思つてしまいそうだった。この人が、嘘の情報をお先に流した。わたしを万引き犯だと偽つて、証言した。

「風邪、って先生、言ってなかつた？」

まともに見るのに耐えられないわたしは、独り言と友永くんにどちらでもおかしくないほど小声で、机の隅にある1cmほどの深い傷を見ながら言った。

「そうかな。昨日、ぼく見たんだよ。渡辺さんが、先生と一緒に相談室に入つてくる。あそこ、知つてると思うけど基本的に出入り禁止なんだ。先生の許可がないとあそこは使うことができない。実際あの部屋では秘密の話しあいがされているつてうわさだから、たぶ

ん渡辺さんは先生に言つたんだよ、他の生徒に漏れてはいけない事実か何かを。知りたいなあ。渡辺さんが知つてゐる事をぼくが知らないなんてあまりにも不公平だよ」

「ねえ」

気づいたら、わたしは友永くんをにらんでいた。

分かりつつも抑えていた感情が、にらみとなつて表れた。  
きつくならんでいるうちに目がパサパサ乾いて痛くなる。その目に  
は、友永くんしか映つていない。周りの生徒の顔は、ジエットコー  
スターに乗つている間通り過ぎていくだけの風景のようになぼやけ、  
そこにあるとは思えないほど薄い。ずっと彼をにらんでいると、涙  
が眼の奥からじみ出ってきた。でもまばたきはできない。わたしの  
目はすでにまばたきといつ行動の存在すら忘れていた。

「ねえ」

わたしは聞いた。

「あなた一体何？」

周りの音も何もかもが耳に入らない。席替えでの歓声も後悔も共感  
も、全て消え死んでしまうようだ。目の神経しか働いていない。そ  
う思えるくらいの無音の世界。

わたしの視線の先にいる彼は、にゅっと頬の端をゆがませた。

屋上のフェンス。緑色の正方形の枠が網目になつてできたフェンス。転落事故を防止するために付けられた、3mはある高い高い緑色をした網。その触れたら軽快な音がする壁に、今彼はもたれている。

「呼び出されたから来たけど」

友永祐一はのど仏を上下させた。

「なあに、一体どうしたいの」

上田づかいで問う友永祐一は、香織を思わず震え上がらせた。

怖い、怖い。

全身の毛が逆立つ香織の皮膚は、じく自然に恐怖を連想させる。

「ほら、なんとか言いなよ」

香織から数メートルしか離れていないにもかかわらず、友永祐一は中学生とは考えられないほどの威圧感を放っている。かなしげりにかかったかのように、香織の足をはじめとする全身が、動こうにも動けなかつた。

「さあ。ぼくを呼んだんだから、話があるんだろ。言えよ」

だんだん命令口調になる友永祐一に、先ほどまで開こうともしなかつた口が徐々に抵抗しながらも開いていく。

「わたしなんとなく分かつてた」

「はあ？」

「でも絶対にそれを表面上でも、自分の中でもあえて出せないようにしてた……怖かつたし、自分を保とうとしていたから。でももうやめる。麻里が無断で学校に来なくなつてしまふなんて、もう耐えれない」

友永祐一の足元を見るので精一杯。

香織はそれでも話し続ける。

「わたし、青井先生から聞いた。全部よ、全部。わたし万引きなんしていないのに、あなたはわたしが万引きしたって先生に言つたら

「せいで、傷ついたのよ  
しにけど、ひどいよね、それ。拳句の果てには麻里は学校に来れなくなつて・・・。あなたのせいよ。わたしも麻里もあなたの

「あのおかあ、さつきから何言つてるんだよ。勝手にぼくが先生に嘘ついたみたいな、ぼくが渡辺さんを学校に来れなくしたみたいな、そんな言い方してるよな」

「そうよ、そんな言い方してる」

「正氣か？証拠も無いくせに。悪いけど、今日塾があるんだ。きみの遊びに付き合つてゐるひとなんて、ぼくにはないんだ。もし塾に間に合わなかつたら、どうしてくれるんだよ」

力強い声で香織は叫んだ。

つばを飲み込む。喉が枯れている。

香織の声は弱く、もろい崩れそうなものになつた。

燒火の月日記

香織の目が閉じる。

頬に涙が、一筋流れた。

昨日。

わたしが青井先生から万引きの件について聞いてから、帰ろうと靴箱で靴をはきかえていたとき。

麻里が、わたしを呼んだ。  
振り向いた。

めがつとした。

手に持つていた上靴が、滑り落ちた。

麻里の顔があのときのわたしに似ている。いじめられていたときの

わたしと同じように、ほとんどの事に対しても無気力無関心でおまけに死ぬ決意すらまともにできない力の抜けた目をしている。

ただ、そこに怒りや恨みの感情は存在していなかつた。

もうわたしはがんばつた、これ以上何かしたってしようがない。

あきらめを超えた絶望の表情。

「ど、どうしたの」

この時、まだわたしは麻里の万引きの可能性がゼロとの自信を持っていなかつたため、「どうしたの」の後に「大丈夫?」という一言を付け加えることができなかつた。

「香織は、わたしのともだちだよね」

「えつ?」

すぐに答えてあげれなかつた。

改めて聞かれて、わたしは自信を無くしていた。

本当に、わたしと麻里はともだちなのだろうか。

そもそも、麻里は最初好意を持つてわたしに接していなかつたはず。わたしが友達のいない孤独な人間じゃなければ、きっと麻里は他のクラスで交友関係の少ない子を日当てにしだらう。なのにどうして友達か友達じゃないかななんて、今さらそんなことを聞くのだろうか。

わたしは少なくとも麻里を信頼してきたけど、一度裏切られてからはどこか全てを託すことができなくなつていて。

だからといって、わたしと麻里の関係が途切れただけでもない。

それでもともだち、と言で表すほど簡単な関係がわたしと麻里にあるとは思えない。

いつたい友達つて、何なのだろうか。

疑問が根をはるよう広がつた。

「・・・・・ともだち、じゃないかな。だって一緒にいることも多いし。よく話したりするし。そ、それにストラップ。あのストラップが何よりの証拠だよ」

「じゃあ・・・・・ストラップが無くなつたらわたしと麻里の関

係はどうなるの？」

白い比較的薄い携帯とつながったストラップの水晶を、麻里は指でトントンとはじいた。

「ちょっと、ちょっと麻里。わたしはただ、これがあるからわたしと麻里はここまでやつてこれたんだって言いたかつただけで。だからそこまで深い意味は……」

「ねえ香織」

「…………」

「わたし、どうしたらしい？」

麻里がわたしを頼っている。

薄皮をむいて現れた麻里の心の弱さ。噛んだら無音で碎けるクッキーやつまむとすぐに砂となるやわらかい石よりももろい、心の弱さが痛いほどわたしに伝わってくる。身体で何か呼ばれた感覚をつかみとる。

その瞬間、わたしは気づいた。

人はそこにいるだけで誰かとつながりあえる。友達恋人兄弟姉妹。それぞれに対して抱く感情は当然違うし、価値観も全く違う。でもどれもみんな境はなく、自分を中心とした同じ円の中にいる。そこに誰かがいるから誰かがいるわけで、相手がいなければ今の自分はない。だからこそ人は人に優しくしたり守つてあげたり、愛を与えてたりする。

大切なことに、気づいた。

「どうしたらいいのかな、わたし」

「うん」

「なんで、こんなことになっちゃったんだろ」

「うん、大丈夫だよ」

「もうわたし逃げたい。隠れたい」

「分かるよ、その気持ち」

「ねえ香織」

「何？」

「わたしが本当の事話して、良いと思つ?」

ダメだ。

泣いてはいけない。

でも、涙が止まらない。

人はどうして訳もなく、泣いてしまつときがあるのでひつ。

悲しみがあるから希望がある。

そうであればいい。

本当に、そうであつてほしい。

「これ話したら、わたし傷つけられないかなあ」

「うん、大丈夫」

「大丈夫?」

「うん。絶対に大丈夫」

わたしに今出来ること。

それは、この際うそでも何でもいいから全てに100%の自信を持つて麻里と接し、支えてあげること。

「いじめられてるんだ、わたし」

麻里はあえてそうしているのか、飛びつきりの笑顔で言つた。でもわたしには分かつた。少なくとも、一度経験したわたしには分かつた。強がっている、麻里は、強がって寂しさをごまかす。なんとなく、わたしに似ている。心が強いのか弱いのかさえ不明な強がりといつものが、麻里の笑顔を作り上げていた。

「ふうん。それでどうだったんだよ。渡辺麻里さんは本当にいじめられていたのかよ」

友永祐一は平然と言つた。

「そう簡単に・・・・・簡単に使わないで。いじめつていつ言葉は纖細なの。その一言だけなのに敏感に反応して、あなたは違うようだけど人によつては怖くなつたり怯えたりするの。だから、適當に口から出さないで。あなたみたいな人がいるから、麻里は・・・・

・・・

「ということは、渡辺さんはいじめられてたんだな」

「あなたのせいよ」

「はあ？」

「あなたのせい」

「だから何だつて」

「わたし今までのことを麻里から聞いたの。あなたに口止めされたこと全て、麻里はわたしに話してくれた。万引きの事も、いじめの事も飾らずに」

「あっ、そう。それじゃあ聞かせてくれないか、市村さん、その真実っていうやつを」

香織が友永祐一追いつめることに徐々にあらわになつていいく彼の本性。それがリアルすぎる近くの位置にあることが、香織の喉を詰まらせる。肩に恐怖がのしかかる。

「・・・・・半年前」

「な、何？」

「半年前、友永祐一は何をしたか覚えている？」

「さあ。分からない。ああ、それがいじめや万引きに関係するのか。でもぼくはしていないよ、そんなこと」

「・・・・・覚えてないんだ」

「いや、覚えてるとかじゃなくてやつてないから」「じゃあ、話したくないけど、話す」

わたしは半年前の 靴箱に入っていた「死ね」の手紙から始まった地獄の日々から、少しづつ胸が苦しむことを承知で今日のこの日までの時間を思い出す。辛いのに容易く思い出せる。思い出したらもう、一気に出でてきて止まらない・・・・・。

・・・・・過去を振りかえることは嫌い。特に苦しい過去ほど嫌い。でもその過去が思いとは逆に記憶からよみがえり心を、心を締めつけなかつた日は一日たりともないはず。それがどれだけ涙が出るほど辛いものとしても、勝手に過去は人を苦しめてしまう。そうなのだ。

本当に耐えがたい過去ほど人は、忘れるふとを恐れ拒むのだ。

## 第5章・3話（後書き）

本当に耐えがたい過去ほど  
人は、忘れることを拒む

自分でも書いていて、意味深だと思いました。  
正直、この言葉の意味は自分でも分かりません。  
しかし、とても大切なことのような気がして、  
このような後書きを書きました。

今月下旬にはこの小説も書き終えると思うので、  
最後まで読みたい、という方は  
ぜひ最後を期待して読み進めてもらえば嬉しいです。

半年前、いやそれ以前からわたしは孤独だったし、故にわたしはじめられさらに独りになつた。やがて麻里と出会い仲良くなりいじめもなくなり、しかし麻里に一度裏切られわたしは復讐を決意した。でも結局いつのまにか復讐心は消えて終了、今までの関係により新鮮さを加えたつながりを取りもどした。

そう。簡単に言えばそう。でもわたしは表しか見ていなかつた。その裏にある麻里の苦しみを、全く分かつていなかつた。自己中心。

わたしは視野が狭かつた。

「いじめられてるの、わたし」

麻里の言葉に、わたしは言葉を失つていた。

「あとね、わたしうそついてた」

「うそ？」

「うん。ずーっと、香織にうそついてた」

「・・・・・」

「あ、でも心配しないで。今から書くことは本当だから」

本当でもうそでもどっちでもいい。

ただ、無理に笑わないでほしい。

出来る限り笑顔でいようとわざわざからぬくしている麻里を、わたしはこのままだとずっと直視できないかもしれない。自分の心の中をのぞいているような気がするから。今まで精神が崩れないように必死で負けてはいけないと自分に言い聞かせひたすら強がりでも実際は相手がいたからやつてこれた、というただただ役立たずの自分を見ているようで嫌だつた。決して麻里をそんなふうに思つてゐるわけじゃないけど、でもどこか重なつて見えた。そのぶん、わたしは

麻里に深く共感できたしそれに麻里の頭をなでてあげたいと思つた。

「香織つて小学生のときどんな感じだった？」

小学生？

「うん。わたしと香織、違う小学校通つてたでしょ。だつてわたし初めて香織のことを知つたとき、誰か分からなかつたもん」

わたしも、分からなかつた。

「じゃあ教えて・・・・・・あ、普通はこうこうとき提案したほうから言うんだよね。うん、そうだよ。あのね、わたし、小学校の時からずつと一人だつた。そのときはいじめられなかつたんだけど、なんかこれ、つていう相手がいなかつたの。何て言うのかなあ。難しいんだけど。うーん、違うかもしれないけど、嫌われはしなかつたんだけど気にされなかつたつて感じかな」

それつて・・・・・グリーンピース？

「えつ？グリーンピース？ああ、あの縁の丸いやつか。小っちゃいよねえ、あれ。それにあんまりおいしくない。なんとなく苦いんだよね。でもいまいち嫌いな食べ物としての意識はなくて。存在感があんまり無いからな」

ねえ麻里。

「何？」

「吐き出しちゃつていいよ、全部

「・・・・・・」

「そうしないと、一生苦しむ事になる。感情的になつてよ。無理に笑われたつて、逆にこっちが悲しくなるよ。だからさ、お願ひ。わたしに全部ぶつけて。受け止めてあげるから」

沈黙が続くその後、麻里は泣き崩れた。

疲れきつて、何も残つていらないような麻里に、わたしは何か慰めの言葉を言う前に・・・・・肩に手をまわして抱きしめていた。泣き叫ぶ麻里の口元での声がわたしの耳でこだまして苦しい。しばらくしてから、麻里は全てを話し始めた。

「小学生のときはなんとか我慢できてたの。でもわたし、中学校に入学してからもつと孤独になつたから。しじうがないんだよね、こういうのは。運命なんだよ。でもやつぱり運命つていう言葉じや片付けられないくらい辛かつたことはあった。わたしの居場所はあるようで無かつたの・・・・。ずっと自分がいる感覚が分からなかつた。話しかけて無視されることはなかつたけど、誰もわたしを仲間に入れてくれたりいっしょに笑つてお喋りしたりなんていう風には誘つてくれなかつた。で、そのうち自分から皆との距離を遠くするようになつた。すっかり臆病になつてたの。

でも・・・・でもずっと疑問に思つてた。なんでわたしばっかりこうなんだつて。ねえ、どうしてだと思う、香織。わたし何も悪いことしてないんだよ。なのにいつのまにか、2学期に入ったときからはすっかりいじめられるようになつてた。6、7、8月の暑さでたまたまイライラがみんな、爆発しちやつたんだろうね。でもさあ、わたし分からぬ。登校してきた瞬間『消える』とか『うざい』とか言られて・・・・意味分かんない。学校にいる間の一秒一秒はただの地獄なの。全身震わせて、下向いて、警戒して、周りを見るたびに心臓が痛くなつて怖くなる。不公平じゃんねえ、香織。こんなの、こんなの不公平だよ・・・・」

麻里は一旦口を閉じ、そしてまた開いた。

「それで探したの・・・・同じ思いを味わつている人。共感したかった。わたしの気持ちを少しでも分かつてくれる人が身近にいさえすれば、もう充分だつた。で、見つけたの、香織を。香織はわたくしがいじめられる前から、そうだったでしょ。だから接触した。じゃないと、誰かに声をかけるなんて勇気わたしからは出でこない。そうしたら、香織はわたしと仲良くなつてくれた。ものすごく嬉しかつたんだよ、ここまで優しさが人間の中にはあるんだつて、本

氣で感動した。だからわたし、あんなストラップを香織にあげた・・・もう絶対に離したくなかった。香織はわたしより大切な宝物だったから。自分の弱さを見てしまふ気持ちを紛らわすには、誰かといつしょにいることが一番だつて気づいてたから、もう香織を失つたらわたしはおしまいだと思つた」

少し分かる、麻里の気持ちが分かる。そんな気がした。

「香織と親しくなつて得したことは、何よりもみんながわたしを普通として見てくれるようになつたこと。わたしに友達ができたとたん、誰もわたしにひどいことをしなくなつたの。わたしそのうち香織がいじめられているのを注意するようになつて・・・しかもみんなが素直にいじめをやめるようになつて、ものすごく得意な気分だつた。

でも、そう現実は甘くなかった。やっぱりわたしがいじめられてたつていう過去は消えないんだつて・・・・・実感した。ある人から、生意気だとか、調子に乗つてるつて思われてたらしくてね。わたしは・・・・・わたしはただ、今まであれだけ苦しんだんだからちょっとくらい主人公になつたつていいんじゃないかなつて。別に欲ばりになつてもいいんじゃないかなつて。思いたかつただけなのに・・・・・なのにまたわたし・・・・・・

さつきと同じように麻里は下を向いて一瞬黙つた。

それから、全ての胸のとげを、痛くても我慢しながら、最も取りやすい位置に動かすかのように、ゆっくり取り除いていくように話を再開した。

「次のやつはひどかつた。クラス全体のものとは違つて、今度は一人から受ける威圧的なものだつた。でね、それがね、友永くんだつたの。友永くんが、わたしにこう言つたの。『今すぐ、市村香織を手放せ』つて。『何をしてでも、市村香織を傷つけてでも、縁を切れ』つて。わたし『どうして』つて聞いた。そしたら友永くん、『あいつが上手くいってるの見るとイライラする』つて。そう言ったの。香織が、わたしと仲良くするのを嫌がつてたみたい・・・・・

。

わたしのすぐ迷つた。だってね、友永くんものすぐ怖かつたんだ。言つとおりにしなかつたらわたしがとんでもない田にあうかもしれないし、もしかしたら香織に何かが……つていうふうに怖かつたの。でもせっかく手に入れた香織を自分から手放すなんてこと嫌だつたし、それに何より香織はわたしの宝物だから……・・・宝物はきれいに磨かないといけないでしょ。ヒビなんて入れちゃいけないでしょ。だから迷つた。なのに……迷つたのにわたしは決めた方向を間違つた。何日もずっと考えたのにね。バカだよね、わたし。だからあそこまで言わなくともよかつたのに。香織はいてもいなくとも同じだつて、香織のこと市村さんつて呼んだりわたしを渡辺さんつて呼ぶよつに強制したり。ひどいよね、わたし。最低だよ・・・・・最低。あれだけ香織を傷つけたのに、なのに香織はわたしと絶交もせずに・・・・・。

どうせなら突き放せばよかつたのにね。二度とわたしの顔を見るのも嫌になるくらい、徹底的にやればよかつたのに。「ごめんね、中途半端な」としちゃつて。香織には一切迷惑かけるつもりじゃなかつたの……「ごめん、言い訳だよね、こんなの。でもわたし謝らないといけないんだ。あのね……謝らないといけないの」麻里はわたしのほうを見てはうつむき、見てはうつむきを繰り返し、そして震えながらもわたしを最後にはきちんと見た。そんな苦しげな麻里を、わたしはどうしても直視できなかつた。

「万引きしたのね、わたし、万引き、したの。昨日、駅前のデパートで……命令、されたの。友永くんに命令されたの。『おまえはおれの言つとおりにしたが、どうして現在も市村香織がおまえの近くにいるんだ。おまえは約束を破つたのか。じやあ、それ相応のことをしてもらわないとな。そうだ、万引きでもしてもらおうか。まずは手始めに文房具か何かを盗つてこい。ああいう小つさいのがすんなりとできるようになれば、そのうち何万とする服だって盗れるようになるだ。大丈夫、安心しろつて。おまえが絶対につか

まらなくなるまで教えてあげるから』。

わたし、いやだつて言えなかつた。拒否したら、もつとひどいことされるつて直感で感じた。だから従つたの。そしたら店員に見つかってね。わたし、これ以上に無いつてくらいがんばつた。なんとか必死に逃げきつてわたしは盗ることに成功した。でも友永くんはその盗つた消しゴムをひつたくつてね、こう言つたの。『素晴らしい。君には万引きの素質がある。明日こそは、ぼくが注文したものを見つてくれ。分かつてゐるだろうな。従わないと、ひどい目にあわすぞ』つて。遊ばれてた。わたし、友永くんの良いように使われたのよ。しかもその後友永くん『この万引きは市村香織がやつしたことにする。おれが証人になつて、市村香織を完璧にめちゃくちゃに潰す』つて言つたの。ハツとした。わたし気づいていなかつた。友永祐一は賢いんだつて、頭だけはいいんだつて・・・・・。気づかなかつたせいで、わたしのせいで・・・・・わたしのせいで香織はやつてもいない万引きの疑いをかけられてしまつたの。だから「ねえ麻里」

これ以上麻里に話しつづけられたらわたしは罪悪感を覚えてしまつ。麻里に何の利益もない悲しみを与えてしまう。他人の心をわたしの身勝手さで揺さぶつてはいけない。わたしは、麻里の肩に手を置いた。

「何・・・・・」

「悪いのは全部あいつだよ、友永祐一だよ。麻里は悪くない。だから、そんなふうに自分を責めないで」

何か違う。

そう感じた。

わたしは、言葉をいつも本心から使つてゐるのだろうか。

友永祐一に全ての責任を負わす、ということは麻里にとつては良いかも知れないがわたしにとつてそれは正しい事なのだろうか。一瞬疑つたけどすぐに、わたしは何よりも麻里のためになつているんだと思い直した。そして・・・・・もう一度麻里を抱きしめた。

## 第6章・2話（後書き）

これまで毎日更新し続けてきましたが、  
明日は更新できなさそうです。  
もしこの小説を楽しみにしている方がいるのなら、  
数日ほど待つていただいてもらいたいです。  
よろしくお願いします。

わたしは麻里に代わって友永くんに話した。

かつてはわたしがなりたくないと思っていた負けの象徴ともいえる不登校児になりつつある麻里に代わって。話しているうちに、わたしは友永くんに対する怒りよりも自分がどうして麻里が抱えていた悩みに気づいてあげられなかつたのかという、どうしようもない自分に対する後悔の怒りのほうが強くなつていた。

そして、わたしの中で一つの思いが崩れ、同時に新たな思いが生まれた。

後悔は人を成長させる。

「だから友永くん。もうやめて、こんなこと」  
わたしは一言言つて、屋上を去つた。

俺は、何をしていたんだ……。  
市村に言われて、俺はやつと目が覚めた。

今まで渡辺にひどいことをしていたことに、やつと気がついた。  
思えば、あのときだつた。俺が施設に預けられることがなかつたら、こんなふうに自分が悪い人間に成長することなんてなかつたはずだ。  
環境を責めるのはよくないけれど、今はそれでもしないとやりきれない状態だつた。

自分が、自分じゃない気がずつとしていた。今ここにいるのは、本当の自分なんだろうか。それとも、仮面をかぶつた嘘の自分なんだろうか。答えの見つからない疑問がいつも頭のなかでうずまいていて、心が痛かつた。

でも、さつき分かつた。自分は自分なのだ、と。  
自分がどういう人間であれ、それを行つたり考えたりしているのは他人ではなくて自分。それを認めるかどうかが、大事な分かれ道だ。

今まで俺は弱い自分から逃げてばかりで、そんな卑怯な自分が嫌で誰かに当たりたくなつて、それで渡辺にひどいことをしてしまつた。渡辺だけじゃない。市村も、傷つけてしまつた。

・・・・・やり直したい。

俺の中で、その時何かが変わつた。

## 第7章・1話（後書き）

友永の中で、何かが変わった部分。

これは全て更新する直前に付け足したものなので、少しまとまつていかないかも知れません。

ただ、思うとおりに書いたので、

それがうまいこと伝われば嬉しいです。

また、更新がいつもより遅れてしまいすみませんでした。

上靴を脱ぎ、パカンといつ高い金属音がする靴箱に手を伸ばし、そして開いた。上靴をその中に入れると同時に通学靴を地べたに放り投げる。つま先をとんとんとして、かかとまで25センチの足を革靴に入れる。

この行為をするたびに靴箱を見るたびに、わたしは今でも身震いして思い出す。

いじめの恐怖、人間の恐怖、を初めて実感した瞬間。

「死ね」と簡単に使う人間の心は、あの日以来わたしの中に置かれたままになっている。麻里が脅されてわたしの悪口を言って、それを真に受けた中学生のわたしが復讐というものを決意したように人は、何か衝撃を受けたとたんどう豹変するか分からない。友永くんだつてきつと、そうなのだ。友永くんにだつて、何か理由があるに違いない。

人間の心は怖く、そしてもうい。そのぶん一発の威力はすさまじい。わたしは身を持つて実感している。

。。。。。。。

胸ポケットにあるケータイが鳴る。なぜか動じてしまった。突然誰もいない周りの沈黙に人間からは出せない機械音が入ったからだろう。とりあえずそういうことにして、わたしは弱くブルブル振動しているケータイを制服の胸ポケットから取り出しパカッと開いた。画面を見る。

「ま、麻里っ」

思わず声に出して驚いてしまった。

ケータイの画面に、麻里の名前と電話番号が表示されている。

その間にも麻里からの着信を知らせる音は寂しく鳴り続いている。

一定のテンポだからこそ感じられない焦りが今回はどうしてもリアルに伝わってくる。もしかしたら、この焦りはわたしの予感からきているものなのかもしれない。ケータイの画面につづる麻里の名前と電話番号、そのケータイから発せられる着信音。わたしは、自然と思い出していた。

渡辺さんから何の連絡も来てないの。

なんか、不安なのよね。こう胸の辺りが騒ぐって感じかな。

ここに青井先生がいたら聞きたい。

今わたしが感じてる胸のざわざわは、先生の不安と同じですか？同じだとしたらわたしはすぐさまケータイのボタンを押して麻里と電話を通してつながっていたし、もし違っていたとしても今日学校を無断欠席した麻里からの連絡、すぐに応答しないといけない。通話ボタンを押した。

耳にケータイを当てた。

無音。

「・・・・・もしもし」

音が全く入ってこない、静寂さのあまりなかなかこの一言を出すことができず数秒戸惑つたが、きちんとわたしは言った。それも、何か嫌な予感がしていたからだつた。ケータイの固い感触がやわらかい耳の皮膚を刺激する。なのに、肝心の麻里の声や息遣いが、敏感に働こうとしている鼓膜に届いてこない。

息が出来ない状態。

死。

呼吸もせずわたしは口を閉じていた。わたしはたまらなくなり走り出した。

ケータイを切る余裕すらなかつた。

さつき感じた胸のざわめきと嫌な予感が当たつていませんように。死に何も起こっていませんように。

ただそれだけを願いながら走った。

周りの風景も音も何も見えないし聞こえない。

あまりの自分の足のスピードについて行けずいつ転げてもおかしくない。

そんなことはどうでもよかつた。

無意識に最悪な状態が想像される。麻里がどこか高い建物から飛び降りる姿、薬を大量に水で飲む姿、赤信号構わず車道に出る姿・・・

・・・とてつもなく怖い。

失う。

一瞬にして失う。

嫌だ、一緒にいた人がいなくなる。

ありえない、ありえない。

そんなこと起こらないに決まっている。自分は思い込みばかりしているマイナス思考の人間だ。当たらない思考ばかりしている、バカな頭をした人間だ。

今回もそうだ。

そうじやないとおかしい。

だって、昨日わたしの手の中には、確かに麻里がいたから。麻里の温かさがあったから。それが無くなるなんて考えられない。

アスファルトの道を走つたり角を曲がつたりしているうちに、麻里の家が見えてきた。麻里の家にはあれから何度も遊びに行つたこともあつたから、それで道順を覚えていたのだ。やがて『渡辺』と彫られた表札のある見た目新しい一階建ての家にたどりついた。インター ホンの四角いボタンが、とてつもなく近距離で目に迫つてくる。これを押し、麻里が出てくれれば不安は取り除かれる。分かっていた。でも、なかなかそれができない。躊躇してしまつ。いつものことだ。慣れた迷いはやけに気分を落ち着かせるが、しかし逆に苛立ちが募る。どうしてわたしはここまで不信なのだろう。自分に対しても誰かに対しても、はつきりと全てをゆだねられない。悔しかつた。思い通りにいかない自分が悔しい。モヤモヤする。こんな思い

してゐる場合じやないの?、なのにすぐこの行動に移せない。

「市村さんっ」

呼ばれた。

そのとき、初めて涙を流していの自分に気づいた。

慌てて指先で涙をぬぐう。

完全にさつきまで泣いてた証拠は消したのに、なぜか振り向いたらそれがバレてしまいそうだったから、呼んだ相手がこっち側に回つてくるまで両手で顔を覆い、下を向いて待つていた。

「…………市村さん？」

どこか聞き覚えのある声。

というより、わたしはついほんの数十分前かそれくらいに、そいつと話した。

「ど、友永…………」

全部あんたのせいよ。

あんたさえいなければ、わたしも麻里も普通に会えてたのに。いや、もしかすると友永祐一がいたからこそ、わたしたちは巡り会えたのかもしれない。そもそも、麻里がわたしに最初声をかけたのは、ともだちのいないわたしと思いを分かち合いたかったからであつて、友永祐一が麻里をいじめなかつたらわたしは、麻里と知り合えてなかつたのかもしれない。

ついついそう思うと、どうしても友永祐一を本氣で憎めない。いきなり心を、そんな感情がざわつかせる。

「友永くん、何、今ごろ…………謝りにきたの？」

わたしは友永祐一のひざ辺りを見ながら聞いた。

「いや。ただ、さあ。悪いなあつて。一人に悪いなあつて

「だから、それを謝るつて言うんだよ」

今なお心を揺らす思いを、口の言葉でかき消そうとした。

「あ、そななだけどさ。でも、おれ市村さんの言つ事を聞いていたら、だんだんひどいことしたなあつて思えてきてさ。おれ、昔から自分がそういう人間だつて分かつてたんだ。後悔先に立たずつていうやつ?ちょっと違うかもしないけど。でも、後悔したつて変えれないことはたくさんある。だから、おれは時々人から見れば悪魔みたいに思えてしまうのかもなあつて」

「うそ」

「えつ」

「どうせ、それも口先だけなんでしょう。あなたは、つこちつき本性を見せた。人間の裏を中学生のわたしに見せた。けつこう辛かつたんだから。だから、わたしはもうよつぱりのことがないとあなたの言う事を真に受けない。これくらいのことを言われることくらいは覚悟して、ここまで来たんだよね」

自分でも言つて思つた。

なんで、わたしは現実から目をそらすのだろう。

今すべきことはこのインターほんのスイッチを押して、麻里の無事を確認すること。無事ならそれでいい。またわたしの思い込みだつたとしても、それでいい。麻里がいるなら充分。そう考えているのに、やっぱりわたしはこんなふうにそらしてしまう。例えば今のよううで、いつのまにかわたしは友永祐一に八つ当たりしている。こんなことしたって何も変わらないのに。

最低なのは、友永祐一でももちろん麻里でも青井先生でもなく、他でもないわたし、市村香織13才少女。こう認めさえすれば、全て変わりそうな気がする。でもできない。自分一人じゃ、どうせ何もできない。

「分かつてる」

「・・・・・」

「分かつてるんだよ、おれ。市村さんにも渡辺さんにも、到底許してもらえないって。だから、何かそのぶん力になりたくて。そうだ、そのケー タイ貸して」

友永祐一はそう言つと、素早くわたしの手からケー タイを奪い取り、電源を入れたままになつていたケー タイを滑らかに操作し、あつといつまに電話をかけた。

「どこに、かけてるの」

「決まつてんじやん、渡辺さんのとこ」

「で、でも・・・・・ 麻里の家はここだよ」

「苦しんでんだろ、渡辺さん。そうだよ、おれのせいだよ。おれのせいだ、渡辺さん不登校になりかけるんだろう。そんな状態の人

間が、誰からか分からないインター ホンの音に反応して上手い具合に出でくれると思うか。おまえ以外の人間と会いたいなんて、思うか・・・・・・

泣いている。

友永祐一が、友永くんが泣いてる。

目をいっぱいに潤ませている。

言葉が出なかつた。

この人は、本物だ。

彼を疑つていた自分が間違つていたことに気づき、胸がキュンッと痛んだ。

「あつ、もしもし！？おい渡辺、家の中にいるのか？」

「ちよつ・・・・・・ちよつと友永くん、麻里、出たの？」

「あ、ああ。で、渡辺、どこにいるんだ、今・・・・・・えつなんて？聞こえないんだけど・・・・・・いや、渡辺の声が小さいんじやなくて・・・・・・そう。周りがうるさい。もしかして街中かどこか？迷つたんだつたら探しに行くけど。それとも駅・・・・・・じゅ、10階！？」

「友永貸して」

わたしは呼び捨てで呼んだ友永からケータイを強い力でひつたくていた。寒さでかじかんだ手が動搖と恐ろしさのあまりブルブル震え、ケータイをうまく持てない。それでも両手でどうにか支え、わたしは麻里と声だけつながつたのだ。

「麻里、麻里ーーどうこうこと？10階つてどー？」

返事はない。

ただ、都会より少し静かな騒音だけが聞こえる。

「ねえ麻里つ！麻里つたら！」

「貸せ」

今度は友永がケータイをわたしから取つた。

「おい渡辺。絶対に、絶対にそこから動くなよ。おれのせいだ。謝る。だから・・・・・・お願いだよ。死ぬな、死なないでくれ。と

りあえずそこに座つとけ。何よりおまえの友達の市村が心配してんだよ。だからさあ、頼む。おれのことなんて、おれのことなんて許さなくていいから、とにかく待つていろ。助けに行くから」

冬なのに汗が出てきた。

怖い。

怖すぎる。

足が、体の全てが拒んでいる。

「行くぞ市村」

動けない。

動こうとしても、足が言うことを聞いてくれない。

「こんなところにいたつてしょうがねえだろ。渡辺がこのままどうなつたつていいのかよ。おれ今さらこんなことするなんて、どうかしてるし最低だよ。自分でも最悪だつて感じてる。でもさあ、いまだに躊躇してる渡辺も、おれはどうかと思つ。

おれさ・・・・・おれ見てたんだ、職員室でおまえが先生に頭下げてる」と。あの時はバカだなつて、おれの思うつぼにはまつてゐなつて笑つてたけど、今なら言える。おれ、本当はおまえが誰かの役に立ちたいつて望んでること。友達なんだろ、おまえと渡辺。だつたら助けてやれよ。友達のために先生に頭下げるくらいのプライド捨てられたなら楽勝だろ、これくらい。それにこのままだつたら渡辺・・・・・何じでかすか分からぬ。それでもいいのかよつ！

「良いわけない。

麻里がどうにかなつて、良いなんて全く思わない。

けど、わたしは臆病だから。

先生には頭下げたけど、行動力はない、臆病な人だから。

「渡辺にはおまえしかいないんだよ。友達がいなくておまえが渡辺しか頼るものを持つてなかつたように、渡辺もおまえ以外を必要としてないんだよ」

友永の言葉一つ一つが胸に突き刺さつた。

わたしはバカだ、麻里をいじめていた友永よりも麻里を分かつていない。ただ、麻里がいることだけに意味があると心のどこかで考えていたから、麻里そのものを一人の人格として見ていなかつた。

わたしは麻里を助けないといけない。

臆病でも、何かできるかもしれない。

「行こう友永」

「い、市村・・・・・・」

「早く行かない。ぐずぐずしてる場合じゃないよ。ほらっ、友永  
つ、つつ立つてないで。お願ひだから早くつ！」

「あ、ああ」

わたしと友永は、「ゴミ収集所に運ばれ終えたもはや原型さえ満足にとどまつていないのであるつ、行方不明になつた大切なアルバムを探し出すかのように走つた。必死で麻里の姿を探した。こういう時は普通相手が行きそうな場所、というのを重点に置いてそこをくまなく見るのだろうけれど残念な事にわたしは麻里のそれを知らなかつた。たとえ知つていたとしても、そこが10階建てかなんて分かりもしないだろう。

改めてわたしは自分を嫌つた。

麻里の心を知らない己を憎んだ。

だから、手当たり次第に走り続け麻里の名前を呼んだ。今感情に振り回されていたら、現状がどう悪化してもおかしくない。

学校の屋上、というのも一瞬考えてみたけれど、あそこは高い、友永が今日もたれていたフェンスがあるから・・・・・飛び降りることができる。可能性としては、この辺りから500メートルほど進めばある高い建物。いくつかのその中のどれかでなければ、わたしはどこまでいけるか限界を決められなかつた。それくらいの本気、わたしは本氣だつた。

走る。

足の筋肉が痛い。

でも、心のほうがもっと痛い。

昨日からずつと痛かつた。

麻里がいじめを告白したときの泣き顔を見てからその後、『ごまかすことのできない不安定の感情が一秒一秒、時計の針が動くたびにズンズンと響き続けていた。言葉で説明してはいけないと思うほどの罪悪感。他人に抱く怒りと恨み。二つが交差して不安定だつた。迷うときには必ず何かが交わっている。そうでなければ誰も悩まないし思つとおりに動けちゃう。麻里はその中間地点にいるのだ。苦しすぎる。心臓の中身をえぐられるくらい恐ろしくて痛い。一寸どちらかに揺れ動いてもまたちょうど真ん中に戻り、今度反対側に傾いてもまた戻る。周りが変わらない限り続く永遠の繰り返し。心のシーソーに乗つたそのとき、よほどのことがないと降りられない。時間と空気の重さがピタリとつまい具合に混ざらないと、心はどうやらか一方に傾き続けてはくれない。

わたしはそのことを実体験し、身に染みているから本気なのだ。だから、痛くても走れるのだ。

「おい・・・・・あの子大丈夫なのかよ」

不意に、そんなことを言つ声が聞こえた。

足が止まる。

ゆっくりと上を見上げる。

10階建ての古いマンション。

その頂上の角。

柵もフェンスもない危険なそこに、

麻里は立っていた。

風一つ吹けば、麻里がどうなるか。もはや、想像する必要もなかつた。

「麻里・・・・・・ 麻里っ！ 麻里っ！」

「渡辺っ、おいつ、渡辺っ！」

わたしと友永の叫びは人ごみの声でかき消される。それでも大声で、何度も何度も麻里の名前を叫んだ。もうわたしと友永はいつ泣きながら死んでもおかしくない状態だつた。

なのに、無関係な見物人が邪魔する。みんな自分の見知らぬ人間だからこんな風に平気で心配できる。といつても全てがこの人達のせいというわけではなくて、それどころここからの麻里との距離は遠いから、静寂の中だとしても声は届かない。

「麻里っ 今行くからねっ」

聞こえなくとも、伝わると信じてそう麻里に向けて言つてから、わたくしと友永はマンションの屋上へ続く階段を駆け上つた。エレベーターを待つてる時間がいやで階段を選んだ。

一段一段が重い。だとしても、止まるわけにはいかない。一瞬でも早く麻里の近くに行つて言わないといけない。わたしは麻里が大好きだし大切な友達だよつて。だから、あきらめてはいけない。疲れを感じなかつた。全くといつていいほど、途中で他の何かを頭がよぎるなんてことはなかつた。

気持ちだけで人は限界を超えるられる。

わたしは自ら知つた。

コンクリートの冷えきつた階段を上り上つた末、そこには広いねずみ色の床があつた。

殺風景。

その何も無い虚しい場所で、一人の中学生が空を眺めている。

後ろ姿だけの影が伸びた、表情が見えないそのままの名を、わたしは

乾いた喉で呼んだ。

「麻里

呼んだ。

「どうしたの、こんなところに来て

振り向かずに麻里はそう言つた。

あまりにも幼い強がりの声に、胸が締めつけられた。

14才。

まだ14年間しか生きていない、言い換えれば14年もの長い間にここまで生きてきたのかもしれない、そんな麻里。

麻里の表情は今、苦しんでいるだろうか。それとも、また前のようにな無理に我慢して笑っているのだろうか、涙が頬を伝つてゐるのだろうか。無表情かもしれない。

どちらにしてもこの微妙な回転を繰り返す時期。  
わたしは共感できた。

どうしても常にある不安を「まかすために演じてしまう。よく分かつた。そのぶん痛んだのだ。一緒に気持ちをわからうというのはこういうものだ。一つの大きな塊、苦しみの塊を半分に割つて互いに支えあう。だから、わたしが今感じてる胸の痛みは麻里がこれまで抱えてきた痛みの半分がそれ以下。その程度なのだ。

だからって死んじゃつていいの？

わたしだけでは麻里以上の重みを背負つ事はできないの？

麻里の背中を見て聞いた。

瞬間、麻里がほんの少し空中に身をゆだねたように見えた。

「ダメッ！」

わたしは麻里のところへ足を伸ばした。

ほんの数歩先の位置だった。

一步一步のたびに固い床と靴底が当たる感触がある。あと半歩。もうすぐそこにある。手を伸ばす。10センチ。5センチ。あとちょ

つと。一センチ。触れそつになる。・・・・・手が届く・・・・・。  
・後もう少し・・・・・。

届いた。麻里の肩に、手が届いた。あつた。麻里はいた。感触がきちんと感じ取れる。まだほんのり温かい。生きている。引っ張る。抵抗は全くなかった。一人そろつて、地べたに体から倒れこんだ。背中が一瞬痛んだ。ゆっくり目を開ける。麻里の額が目の前にある。  
・・・・・助かった。

麻里は助かったのだ。

わたしは思わず麻里をそのままの姿勢でぎゅっとした。

「嘘・・・・・」

ぎゅっとした。

麻里の温かさが普通より格段にぬるい。

体温じやなくともつと、心の温度が低いのを感じたのだ。

この冷たさは麻里の深い傷を表しているのだと想いつと辛かった。

「渡辺・・・・・市村」

友永がそう名前を言つ。そして、友永の足の力が抜けて地面に崩れるドンッといつ音がした。

「ほんとによかつた・・・・・」

表情の分からない友永は嬉しそうにしぶやく。

わたしはコンクリートの上で涙を流すことなく泣いていた。

麻里はちゃんとここにいる。助かった。安心があった。でも、同時に悲しみもあった。心でしか説明できない言葉を使って表現できない感情。わたしは麻里の手に触れた。

「どうして」

瞬間、コンクリートに座る麻里がうつむき氣味につぶやいた。

「どうして・・・・・いるの」

誰かに問うまでもなく、麻里は肩を震わせていた。

そりやそりや。自分のしたくないことを強制的にせられ、仕舞いには万引きという犯罪の域まで及んでしまう。どんな14才でも簡単に忘れたり捨て去ったりなんてできないだろうし、自分をこ

ここまで追い込んだ相手を受け入れるなんて普通すぐには無理だ。

わたしは考えた末黙つたまま唇を噛んでいる友永に、

「謝つて」

強く鋭く言つた。

「わたしも謝るから」

冷たいかつ優しい風が、ヒィューといつ音で吹ぐ。その吹かれた風はわたし、麻里、友永の、それぞれのボロボロになつた心を羽毛で柔らかくふわりと包むようにしばらく囲み抱いた。

「ごめん・・・・・・ごめんなさい」

友永の吐かれた息が鮮やかに白く彩られ、そのまま溶けた。頭を深く下げた友永の頭頂部のつむじはきりつとしている。

それでも麻里は、なお友永を恐れているように友永に背を向けるような形でいる。わたしは体を半回転させ、麻里と向かい合つた。そんなわたしの行動に気づいたのか、麻里はゆっくりと、顔を上げた。涙を我慢している表情だった。あまりにも強く、そして弱い麻里を見ていると痛々しくてたまらない。

「ごめんね、麻里」

わたしは苦しくてもしつかりと麻里を見て言つた。そして着ているコートを脱ぐと、麻里が着ている長袖のシャツと水色のセーターの上にそれを軽く重ねた。学校からそのまま走つてここまで来たから、着ていたコートは学校で指定されたタイプの黒い素つ氣ない物だったけど、ものすごく麻里は見た目明るくなつた。少なくとも、人間としての温かさは取りもどしたように思えた。

「わたし、麻里にしてほしい・・・・・・ずっと、一緒にいたい」

麻里を、わたしはもう一度抱いた。

麻里の心臓の音が直接、伝わってくる。

とても、温かい。

そう感じた。

同時に、麻里の我慢していた目から・・・・・涙があふれ出た。たつた一滴、たつた一滴だけど、その中には今までの様々な思いが

ぎゅっと凝縮されているような気がした。この一滴が、麻里の心を締めていた複雑にからまるひもをほざいたように見えた。

本当の自分を全て表に出した麻里。

わたしは自分で自分で自分を追い込んでいたいつしかの時の記憶を思い出しながら、泣きじゃくる麻里の背中をさすっていた。

## 最終章、大切なこと

その次の日友永はわたしに謝ってくれた。

そして、先生についた万引きの件の嘘についても、ぼくの勘違いでした、と否定してくれた。

「分かった、店の方にはわたしが伝えておく

と、模範の生徒には必要以上に深く質問をしようとは思わないらしい校長と教頭はそう言つたそうだ。かといってこれが万引き事件の終了、というわけではなくて、麻里は誰に説得されるまでもなく盗った消しゴムを手にし、デパートへ出向き謝つた。

デパートの偉い役職らしき人は

「君がそう自分から告白してくるのを待つていたんですよ

と、考えられないほどの優しさで許してくれ、

「けれど、君のしたことは犯罪です。絶対にしてはいけないことがありますよ」

そう最後に麻里に忠告したそうだ。

こゝにして半年間に及んだ様々な出来事は今、終わるつとしている。一つの事を除いて。

そもそも、わたしが万引きの疑いをかけられたのも全て友永のせいだつたわけで、わたしは友永が謝るのは当然だと思っていた。でも、友永が今まで麻里をいじめたりわたしが万引きをするところを見たと先生に嘘をついたのも、後で知つたことだが友永には友永なりの事情があつた。それを知つたとき、わたしはどうして悪いことはこう連鎖してしまうのだろうと思つた。

だいたい人に悪い事を平氣とする子なんて家庭に何か問題があるものなのよ。

よくわたしのお母さんだって言つし、ドラマやコースでも時々そういう言葉が出てくることはある。けれどそれは当たつていなかつた。で友永の場合は当たつていなかつた。

友永には・・・・・親がいなかつたのだ。

「ちょっと、話があるんだ」

終業式が終わつてすぐ、友永は体育館裏にわたしと麻里を呼び出した。というよりかはどちらかといふと友永は麻里だけを目的としているようで、わたしはいわゆる仲介役のようなものだつた。わたしにはそう思えた。その証拠に、麻里はさつきからずつとわたしを横目でちらちら見てゐる。わたしが体育館裏に行かないと言つたら麻里は自分もそう言おうと頭の中で準備しているのがバレバレだつた。このままじゃいけない。そう少なくともわたし一人は感じていたけど、それでもしようがないのかもしれない。麻里はまだまだ友永を信じきれていないのだから。

そのせいか、影で薄暗い体育館裏にいるわたしたち三人の位置はとてもなく微妙だ。簡単に言えばトライアングルだ。でももう少し詳しく説明すると、わたしからの麻里と友永のそれぞれの距離はほぼ、というか全く同じで、わたしたち三人を線で結んだとしたら一等辺三角形と似た形になりそう。

気まずい。

沈黙が重い。  
時計の針が奏でるチクタクの音。場をよりいつそう静寂で包むこの音すらなくて、ただただわたしたちの距離は緊張の白い糸をどこまでもどこまでも永遠と伸ばすばかりだ。

どうすれば正三角形にすることができるのだろうか。どうすればわたくし、麻里、友永それぞれの距離を均一にし、固い固い何があつても切れない太い線分で結ぶことができるのだろうか。

考えるのは考えるのだけれど、その答えビビリカヒントですら浮かんでこない。

無駄に頭脳を回転させるよりかは、この硬直した空氣を一気に裂くくらいの大聲で日本語かどうかも不明な發音で叫んだほうがよっぽ

ど賢い。でも、その力だけあればどうにかなる大声、といつものが出るほどの余裕は、震える喉には残念ながらない様子。

キンキンとした冷たい風が容赦なく体を刺す。

寒い、寒すぎる。

思わずポケットに手を突っ込んだ、その時。

「あ・・・・・・」

麻里からもりつたストラップの感触を、手が察知した。

わたしが初めて嬉し泣きした日。思い出すだけで、頭が熱くなる。完璧なくらい嬉しかった。あのとき、他の感情はどこにも一切なかった。率直に感動し、胸が温かくなっていた。

「あ、あのさあ」

勢いで言つていた。

麻里と友永が二等辺三角形の頂点であるわたしを見つめる。

「あの・・・・・・まあ」

自分がこの後何を言おうとしているのか全く持つて不明だった。でも、不思議と自信はあった。

今までしおりちゅう行動と考えの間でいた中途半端な自分が、このときは見え隠れすらしなかつたのだ。

「麻里、これ、持つてる？」

わたしはケータイをポケットからぎこちない手で取り出し、それとつながつたストラップを親指と人差し指でつまんで見せた。すると麻里は無言でうなずいて胸ポケットからそれを出した。

水晶が輝いている。

わたしは、深く呼吸し、

「買ひに行かない？今から」

提案した。

「買うつて、何をだよ」

「何をつて・・・・・・決まつてるじゃん、このストラップだよ。友永は知らないんだろうけど、実はこれ、すごいんだよ。麻里が買ってきてくれたんだけどね、魔法がかかつてるんだ。このストラッ

プを持つていいる限り一人は一生離れない。300円なんだよ。びっくりしない？たつた300円で、つながりあえるんだよ、ずっと。しかも実証済み。わたしと麻里が、このストラップがただものではないことは保障する。まあ、たつた半年なんだけどね、わたしと麻里が壊れなかつたのは。でもこれを買わない手はないって……。

「 言つてる間、なんとなく、頬から耳の先まで赤くなつていくのが感じ取れた。

好きな男子に告白しているわけでもないのに秘密をばらされておどおどしているわけでもないのに大舞台で失敗して恥ずかしがつているわけでもないのに、顔がほんのり熱い。

「だからさあ、買いに行こう、麻里と友永のぶんも」  
強引だと自分でも言つて思つた。

麻里にも友永にもお互い仲良くしあおうという気持ちはない、見たら分かる事だ。友永にはもしかしたら少しならあるかもしけないけど、麻里には皆無だ。当然といえば当然かもしえない。自分を死ぬ決意をするところまで追いつめたのだから、到底許せるはずもない。ましてや、おそれのキー ホルダーを持とうなど、思いもしないだろう。

わたしも友永に万引き犯と勝手に役決めされたことを所詮過去のことだと簡単に忘れられないし、麻里に精神的な苦痛を与えたことはしてはいけないことだ。わたしは友永を許してはいない。でも逆に言えば、だからこそわたしはそんな友永をこのまま放つていてはもつと大変な事が起こるような気がしてならなかつた。優しさなのだろうか、これは。自分でもよく分からない。ただ、麻里にも友永にも今の状態のままで生きてほしくはない。引きずったまま、年を重ねてほしくない。それだけははつきりとした思いだった。

「渡辺、おれ、話すよ」

友永が口を開いた。

「そもそも、おれがここに呼んだんだし、まずは話すべきこと話し

て・・・・・そのうえで渡辺が良いつて言つんだつたら、おれは買つてもいいよ・・・・・魔法のキー・ホルダーってやつ、なんか女子っぽいけど

思わずヤツターッと叫びそうにならう嬉しかった。

友永にとつて魔法のキー・ホルダーが女子っぽく見えたのをプラスしてでも充分すぎるくらいの喜びと満足感が、心の水槽をあふれるくらいの温水で満たした。

初めてかもしない、わたしが勇氣を出して行動して、それが誰かの心を動かした。

「とりあえず話して」

友永が麻里とおそろのキー・ホルダーを買つてもいい、と発言したことに相当動搖したのか麻里は、自分の意見が正しいと思っていたのに周りはそれを批判していたからしじうがなく戸惑いながらも他人の意見に賛成した、そんな声のトーンで言つた。

「おれ、親いないんだ」

友永は半分下を向きながらおもむろに言つた。  
わたしは「えつ」と心の中だけで叫んだ。

麻里も無表情で、友永を見ている。

本当に驚いたときほど、言葉と表情でそれをとつさに表現するのは難しいものなのだ。

「突然の報告つてやつ? 寒はおれ、今施設で育つてるんだ。もう十年になる。おれ、一才かそれくらいのころに・・・・・そう、捨てられてさ。物心つくずっと前だつたから、気がついたときにはもう施設が家、みたいな感じだつたんだ。

最初のうちはなんとも思つてなかつた。でも一年経つて一つ年増えるたびに、だんだん思うようになつてきた、おれは不幸なんだなあつて。親に飽きられて・・・・・いらなくなつたがらくたみみたいに捨てられて。なんて不幸なんだうつて。

幸い施設での生活は楽しかつたけど、やっぱりいつも心は物足りなかつた。小学校の入学式も運動会も授業参観も音楽発表会も卒業式

も全部、寂しくなる以外の何物でもなかつた。その間、自分を見る人なんて一人もいなかつたんだからさ。そりやそうだよな。親は何だかんだ言って、自分の子を一番愛してる。他の子がどんな活躍をしていようと、記憶には残らないんだよ。で、おれはどんどん腐つていつたわけ

腐る、という表現が人間にに対するものではないような気がして、わたしは身震いした。

自分には親がない、という友永の話を聞いている間、わたしはずつと胸が痛んでいた。

「腐つていつた。心が枯れていつたんだよ。親がいないから、人よりも他人の幸せに敏感になつていて。人の笑顔を見るのが、だんだん嫌になつてきてそのうち・・・・・・妬むようになつたんだ。怖いだろ。おれ自身も怖かつたからな。だからせめて、周りにはばれないように良い子つていうやつを演じてた。演じてる間は、ただただ夢中だつた。自分を忘れられていた。でも、それも何度も試してるうちに効果が効かなくなつてきた。演じてる間も、どこかに本当の自分があつて、時々ふつと戻るんだ。そういうときに見る人の笑顔が何よりも、苦痛で嫌いだつた」

わたしも嫌いだつた。いじめられている間、わたしにない幸せを持つている人を嫌つっていた。だからよく分かる。でも、わたしより友永のほうが苦しんできたことは明らかだつた。そして今も、友永は一人で悩んでいる。

「おれ、人つていう同じ生き物の中でも、市村と渡辺は特別だつた。最初は一人とも友達いなそうで、あ、おれと似てるつて思つてた。でもそのうち市村がいじめられるようになつて、ずっと前からいじめられてた渡辺が市村と仲良くなつて、おれ戸惑つた。このままじゃ誰とも共感できないつて思うと怖かつた。おれの苦しみを分かつてくれる人がいなくなるなんて、考えただけで不安になつた。それで、なんでなんだろう・・・・・・おれ、市村と渡辺との間に壁を作りたくなつたんだ。それで、渡辺に市村と縁を切れつて脅し

て・・・・・一度は一人とも仲が悪くなつたように見えたけど、そのうち普通に話すようになつてて。おれ、あのときは混乱してたんだ。言い訳と思われてもいい。でも、いつのまにか自分の寂しさを紛らわす事以前に、どうやっても不幸にならない市村と渡辺自体が憎くなつてきたんだ。

それで・・・・・それで渡辺に万引きをするよう命令して。最初は渡辺がおれの思つとおりに動くことに快感を覚えていた。でもそのうち、どうせなら市村か渡辺のどちらかを万引き犯に仕立て上げよつていうものすごい悪い感情が生まれてきたんだ。もうおれ、このとき性格が変わつてたんだ。で、市村が万引きをしたところを見たつて、うそついたんだ。罪悪感の一つも心にはなかつた・・・・・。そればかりかどんどん自分が崩壊していくことが怖くもおもしろくもあつた

どうしてだろう。友永の施設で育つていていう呪いを聞いてからのはうが、友永が憎くなつてくる。自分を正当化しようとどこか必死な友永が今まで見てきた何かと重なり嫌になる。友永はわたしたちに許してもらうために自分の秘密を犠牲にしたのだろうか。だったらわたしは、もつと友永を許せなくなる。飾つてほしくなかつた。

全部わたしのせいだつて、言つてほしい。

もつと欲望的になつてほしい。

今までずっと、一人で抱えてきた望み。でも何かすればするほどそれは遠ざかっていく。わたしは、いじめられていたのだ。なのにこのまま、普通になつていいいのだろうか。

「でも今なら言える。おまえら一人には、何をしたつて許してもらえないくらいのひどいことをした。改めて謝る、ごめん」わたしの中で様々な迷いが生まれる中、友永はそう言いかけた。

パチンツッ！

でも最後まで友永が言い終わらないうちに、麻里の平手打ちが友永の頬を命中した。

激しい音。

肌と肌が衝突しあう、何とも言えない痛々しい音。

その音とともに、友永の首が九十度曲がった。

胸の奥から息がこみ上がってくる。

それでも友永を眺めていたら、しばらくして、友永はゆっくりと振り向いた。

途端、わたしの口は思わず半開きになつた。

友永の左の頬が、赤くなっている。

「大丈夫？」と声をかけながら手で触つたら、こっちにまでヒリヒリとした電気ショックにかかつた直後のような痛みが乗り移つてきそうだつた。

でもなぜだかわたしは、心にずっと刺さり続けていた魚の骨が、ポロッと取れたようなこの世のものとは思えない気持ちよさを麻里の言葉と友永の頬から感じていた。その理由は、わたしが今まで気づきもしなかつた、麻里が言うこの言葉で分かつた。

「昨日からなんかモヤモヤしてた。やつと分かつたよ、わたし。友永は謝つてばかりでわたしたちの気持ちを理解しようともしない。一方的に頭下げて、どうにか許してもらおうとばかり。そういうのってね、バカの友永には分かんないだろうけど謝られてるほうからしたら一番嫌な行為なの。それに、謝る友永にとつても、何よりしゃいけないことなのっ」

あまりの痛さに必死に涙をこらえている友永には悪いけど、わたしは正直これ以上の心地よさは無いんじゃないかと思うくらいスカッとしていた。それに、愛のムチとは違うかもしれないけど、麻里の言葉は友永の一番の弱さをついていた。そのぶんこの平手打ちは何かしらこれから友永のためになるんじゃないか、そういう予感があつた。

「でも、ちょっとは共感してあげる」

麻里は急に穏やかな表情になつた。

「香織はもう知つてると思うけど、わたしの家共働きなんだ。とい

つても生活に困っているからお母さんがしおりがなく、つていう感じで働いているんじやなくて、一人とも好きでやってるの。

特にお母さんは忙しいみたいで、わたしと会えない日だつてある。だからのかなあ、わたし、昔から家事つていうやつつけっこう頻繁にやつてきたと思う。普通、親つて勉強しなさいってうるさいもんじゃん。でも、家は違つた。勉強するくらいなら家事覚えなさい、手伝いなさい。そればっかり。といつても、わたしがやらなきゃ家は「ゴミ屋敷になっちゃうから、しようがなかつたんだけど。それにわたし一人っ子だから、平日は基本的に自分で晩御飯つくつて一人で食べてる。寂しいなあって思うこともあつたけども、慣れつていうのは怖いよねえ、今じゃこれが当たり前になつてる。

・・・・・だからなんとなく分かる。こんなちっぽけな悩みを抱えているわたしにおれの何が分かるんだよつて友永は言いたくなれるかもしれないけど、でもわたしはちょっとだけ分かつてゐつもり麻里も友永もそれ別なものを背負つていて。

わたしはどうだらう。二人に比べたら、まだまだ幸せといえるのだろうか。よく分からぬ。それに幸せつてどつていうものなのかもさえ、いまいちイメージがわかない。でも、一つだけ自信を持つて言えるのは、たとえグリンピースみたいな微妙な嫌われ者で脇役の脇役のような存在でもいいから自分らしく、自分らしく生きていればそれでいい。自分を無理に閉じこめずに、嫌なのに自分を変えたりなんてせずに、そうしていれば、いざれどうにかいい方向に向かう。この半年で、わたしなりに学んだことだ。

「友永のこと、分かつてゐつもりだよ」

麻里の言葉に、わたしは気づいた。

いつのまにか、麻里もわたしも友永を、友永もわたしと麻里を、それぞれ呼び捨てで呼ぶようになつていて。しかも友永は自分のことをぼく、じゃなくておれと呼ぶようになつていて。

半年。たつた半年で変化するのが、この年代の特徴、だつたりするのかもしれない。心の中で様々な大きさと色の波が止んだり流れ交

わつたり、を繰り返す。それを楽しめるかどうか。今までのわたしはあまりそれを受け入れようとしたけど、これからは極力そんな自分と向き合っていきたい。それから、麻里とも友永とも正三 角形を築いていけるようになりたい。

「といっても、誰かに自分の勝手な怒りや恨みをぶつけちゃいけないって思つ。だって地球は丸いんだよ。自分がやつたことは、一周してちゃんと自分に返つてくる。だからたぶん、誰かに悪いことをしている間は心が後ろに引っぱられるみたいに痛いんだよ」

麻里が照れ気味に言う。

さぞかし恥ずかしいんだろう。

わたしだって、こんなこと思つても一人の前じゃ言えない。友永はまだ痛そうに頬をさすつている。でも顔は笑っていた。わたしはといえば、正直半歩くらいしか進めていない。でもわたしはそれを、いつか大前進するための休息と見ることにする。三人の靴の下をやわらかな冷気が通り過ぎる。

薄暗い体育館裏が日で照つて、空気がふわりと軽くなつた。

## 最終章、大切なこと（後書き）

「グリーンピース」を最後まで読んでくださり、本当にありがとうございました。

改行が少なく、読みにくい部分もあつたと思います。そこは僕も反省しています。また、内容も分かれにくかつたかもしれません。

それでもここまで読んでくださったあなたには、感謝してもしきれません。

本当にありがとうございました。

僕がこの小説で伝えたかったことは、正直漠然としている部分もあります。

ただ、これを書いたことによって、自分に甘くて精神的に弱い僕自身、何かしら成長することができました。

読んでくださったあなたが、僕と同じように何かを感じてくれたら幸いです。

ただ、香織、麻里、友永、それぞれの苦しみを書ききれなかつたことが、残念です。

もう少し香織の視点ばかりではなく、2人の視点も描きたかつたです。

しかし、今回小説を書いて学んだことは計り知れません。

そういう意味では、3人にはとても感謝しています。

執筆開始から約1ヶ月間、本当にありがとうございました。

またお会いできたら、そのときはまた、よろしくお願いします。

以上、春のやわらかな光が窓から差し込む、小部屋からの後書きでした。

2008年3月24日 セン

4月4日の午前中まで、後書きにある登場人物の名前が間違っていました。

指摘してくださった方には、ほんとうに感謝しています。

また、間違いに気づいていても言いにくかった、という方は申し訳ありませんでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7398d/>

---

グリーンピース

2010年10月13日17時45分発行